



## 目次

以後一日の掃海作業が終わって宮古島沖に帰投す田中武利さん証言（15歳、戦後の掃海隊乗組員、海防艦洋上生活） .....	263
匿名証言（28歳、旧朝鮮憲兵隊司令部） .....	266
小高丑松さん証言（当時20歳、満州で兵役後シベリア抑留） .....	268
志伊良正幸さん証言（19歳、暁部隊、大隈半島大根占） .....	270
田岸敏子さん証言（16歳、中国旧満州大連関東軍付属陸軍看護学校生徒） .....	273
b. 内地 .....	277
田中克己さん証言（19歳、陸軍少年特別幹部候補生、神奈川県鎌倉） .....	277
田村清市さん証言（19歳、予科練一等飛行兵曹、小松海軍航空隊） .....	279
三宅勝利さん証言（24歳、海軍滋賀航空隊第9分隊） .....	283
白井進さん証言（15歳、陸軍幼年学校、大阪府南河内郡千代田村） .....	286
高橋登志男さん証言（23歳、船舶情報連隊見習士官、兵庫県西宮） .....	291
神田光一さん証言（25歳、航空情報第1連隊、静岡県磐田市） .....	294
中村美代さん証言（17歳、千葉陸軍病院救護看護婦、千葉市椿森） .....	296
（4）外国占領地生活と引き揚げ経験（民間人）（4人） .....	298
岩品美津子さん証言（18歳、ホテル従業員、中国旧南満州鞍山市） .....	298

私は一歳誤魔化して十六歳という事にした。

## 以後一日の掃海作業が終わって宮古島沖に帰投す田中武利さん証言（15歳、

### 戦後の掃海隊乗組員、海防艦洋上生活）

一九四五年八月十五日、太平洋戦争が日本の無条件降伏でし、ここに第二次世界大戦の戦火は完全に消滅したのだった。

敗戦後日本は海外に展開した、膨大な軍隊の撤収と日本近海に浮遊している大量の機雷機雷の迅速な処理は戦後平和の回復にとって緊急を要する課題であった。

連合国側は日本近海の掃海作業は日本海軍で行うという方針をとってきた。日本海軍は各鎮守府の掃海艇はそれぞれ、主要港湾や瀬戸内海などの掃海作業をやり、海洋の大がかりな掃海の為に海防艦による掃海隊を編成した。年が明けた一九四六年の正月には、海防隊は本州と北海道を結ぶ海上の大動脈津軽海峡の掃海作業を終えて浦賀港に集結していた。私はその戦後の掃海隊の一員に選ばれたのだ。

浦賀港では各艦ドック入りをして船体の点検や整備を行った。

私は当時未だ十五歳で昨年五月武山海兵団に入団した最下級の水兵として、掃海隊の旗艦倉橋の乗組員になっていた。

正月が終ると掃海隊は錨を上げて出港した。行く先は沖縄海域であった。館山沖に日本側がチャーターしたらしい米軍の1万屯級の輸送船が数えると十隻も連なって錨を下ろしている。船の高い甲板にカーキ色の人々が群がって手を振っているのではないか。コレラ発生ということで隔離されたまま祖国の大地を踏めない兵士だ。その向こうから米航空母艦の単独航行だ、わが艦はマストの日の丸を半旗にして敬意を表した。

掃海隊は沖縄海域まで南下すると宮古島の太平洋側に投錨した。朝になって海をながめると少し離れた所に米掃海艇の姿があった。その日、カッターを出して、掃海隊指令を兼ねるわが艦長は米艇を訪問した。

艦長の用事が終わるまでカッターは待つことになる。米乗組員も甲板に群がって来る。そのなかにまだ子供子供した水兵と目が合った。彼は十七歳だった。ると艦長は打ち合わせに米艦に行く。私はその時必ずカッターの櫂（かい）を握るようにした。二人は何時か友達になっていた。

掃海作業は二隻でペアをつくって行動する。こうして、打ち合わせで決めた海域を終日かけて作業を続けるのであるが、米側は米側でやり、日本側は日本側で行動した。

艦の最後部甲板の左右に、爆雷投射台がある。爆雷は潜水艦攻撃用爆弾のことで、ドラム缶のような形をしていた。台の上に並べて置いて海へ落下して水

中で爆発させるのである。

掃海索の束を互いにつなぎ合わせてこの台の上に並べるのに都合よく出来ていた。倉橋と組む艦は屋代だった。掃海海域に到着した倉橋に屋代が接近して並ぶと倉橋からもやい銃が撃たれる、細いロープを弧に引いて屋代の後甲板に落下する。ロープには太いロープが続く。それに屋代側で掃海索をドッキングして倉橋に返る。そして倉橋の掃海索と屋代の掃海索がつながって海にレッコされる。こうして終日行ったり来たりの航海を続けるのだ。

機雷は海底に沈めた錘から細いワイヤーを引いて、一定の深さに決めて浮いている。主に海上を航行する艦船の船底に接触して爆発する。しかし音響機雷や磁気機雷なども使われている。

機雷の処分は掃海索で機雷を浮かべているワイヤーを引っかけた時にそのショックで爆発する。かなり水深のあるところで爆発するので水柱はほとんど立つことはないが海面が段丘のように盛り上がる。だがワイヤーの切断で処分できず海面に浮上して浮遊機雷化した時に備えて各艦は機銃を準備してあった。

沖縄海域では一度倉橋は機雷と接触している。死ぬんだな、私は観念したが爆発しなかった。機銃で処分しても海底に沈んでしまった。不発弾で艦も乗組員も助かったのだ。

三月に入ると水が不足してきた。バスが無くなり、洗濯も禁止。遂に朝食の飯も汁も海水で調理されていて口に入らないものになっていた。

やっと補給船が姿を見せた。水や燃料や生鮮食料が届いた。家族からの手紙まで配達された。四月に入り私の誕生日が来た。十六歳になったが誰にも言わなかった。月半ばのある朝米艦の姿がなかった。その日掃海隊も錨を揚げた。十七歳の米水兵とさよならも交せなかった。浦賀港は変わらず復員船の出入りでにぎやかそうだった。復員船の入港の度、リュックを背にした集団が海岸通りを埋めて行進して行く。

沖に真白い巨大な船体に赤十字のマークも鮮やかに病院船の姿もあった。赤十字の腕章をした看護婦たちがランチで岡にむかうのをながめながら掃海隊が浦賀港を後にしたのは、もうすぐ五月だという時だった。右に伊豆の大島を眺めると御神火が雲かすかに風に流れている。掃海隊は進路を北に向けていた。

海に槍を突き刺したような尻屋崎を越えると津軽海峡に入った。陸奥湾の奥の大湊港に入港した。ある日入湯上陸の際にK兵曹に誘われて、同年兵を下士官官舎に尋ねた。運よく同年兵の人が居て私までその晩はやっかいになった。奥さんが話し好きの人で「辺りの鉄道の枕木は一本一本が人間の体だと思って間違いではない」と言った。だいぶ憤慨している話しぶりだった。

大湊港を後にした掃海隊は北海道の日本海側に出て北上を続け、稚内港に入港した。宗谷の海はまだ冬だった。艦では倉庫に眠っていた防寒服を引き出し

た。それでも肌に突き刺さってくる海風は耐えられない程だった。

宗谷海峡の海は水平線に浮かぶ樺太の島山の下にロシアの掃海隊らしい姿を遠く眺めながらの作業が始まった。宗谷海峡では樺太からの引揚船が機雷に触れて沈んだという風聞を耳にしていた。一間に合わなかったのか。という思いが胸に残った。掃海作業を終えて稚内に帰投する時、水平線に沈もうとする太陽の最後の輝きが利尻島の険しい島山を黄金色に縁取るのだった。一日、東京から慰問団が来て掃海作業が中止になった。

七月に入ると稚内に一気に夏が訪れた。木々は花が開き、葉が青々と繁り始めた。鉄道栈橋にホッケ釣りの子供たちが集まって来る。真夏の太陽がじりじり照り付けている日に掃海隊は最北の海と街にさよならを言った。

大湊港に錨を下ろすと、乗組員に家に二泊という条件で帰省休暇が出た。千葉まで一昼夜の長い汽車の旅だが胸が弾んだ。

休暇が終るのを待って東北沿岸の掃海作業が始まった。八戸港に先ず掃海隊は入港した。久慈、宮古、釜石、気仙沼、石巻など名のある漁港が並んでいるのである。まだ夜の明け切らない沖の方から漁船らしいエンジン音が近づいてきた。双眼鏡で見ると二隻のキャッチャーボートが舷側に巨大な鯨をくくりつけて走って来る。海猫の繁殖地として知られる蕪島（かぶしま）の下に入って行く。鯨はその浜で解体されるのであろうか。

この海で漁師たちは機雷を恐れながら毎日操業を続けているのであろうか。

機雷の処分は、ある時は立て続けに行われたり、時には全く爆発がなかったりする。浮遊機雷の発見は又、航行している艦船には大変困難なのである。

東北の秋は足早にやって来る。港町に上陸した時、街角で七輪の火で焼いて売っている唐黍の味が故郷を思い出させてくれる。

大湊港に掃海隊が帰投した時は、港の邑久の釜伏山に冬の気配さえ感じられていた。大湊港を発って浦賀港に入港した時にはそろそろ関東地方も初冬の季節に入っていた。

掃海隊は任務を解かれて、錨を揚げ、観音埼をうかいして横須賀は水雷学校前面の長浦港の奥に係留した。そして、乗組員総員下船命令が下った。各自故郷に復員することになった。

ただ一人私には「艦船運航部付」の辞令が渡された。

横須賀線田浦の駅で上り電車が着いて、復員して行く人々が乗り込むとドアが閉じた。遠ざかかって行く電車に手を振って別れた。なんだか胸のなかにぽっかりと空洞が開いたような淋しさに一時おそわれた。久里浜行の電車が入って乗った。電車が動き出した時にチラッと倉橋の物らしいマストが見えた。

倉橋は戦争の賠償として何処かの国へ引き渡されるという話が耳に残っていた。私は肩の荷物をせり上げながら、ドアの所に立っていた。久里浜駅は三つ

目だった。「終」

(証言者注)「船の墓場の日本近海」

太平洋戦争末期に米軍B 2 9 重爆撃機延千百六十機による機雷投下作戦が日本近海に実施された。米軍は「飢餓作戦」と呼び日本本土の完全な海上封鎖が狙いであった。機雷一万七百三個が投下され、終戦までの四ヶ月間に日本側艦船の損害六百六十二隻にのぼった。日本側の機雷敷設数は計五万五千三百四十七個であった。戦後掃海作業中の被害、犠牲は船舶三十隻、死者七十六名、重軽傷者二百名であった。(朝日新聞一九九一年(平成三年)六月二日一日本特別掃海隊より)

### 匿名証言 (28 歳、旧朝鮮憲兵隊司令部)

1945 年(昭和二〇年)1 月、空襲警報下の東京上空、ドーン、ドーン高射砲射撃の砲声響く中、晴れ渡った青空を米国のB 2 9 が約一〇機、爆撃を終え編隊を組んで東方に向かっていている。編隊の輪が急に縮まった。日本軍の戦闘機が数機これを襲っているのだ。大きさ、数では問題にならない。ピカッと光ったと思うと反転、黒煙をあげて墜ちていく友軍機。白い落下傘が開いた。もう一つは変だ。落下傘は完全には開かず、これを長い帯の様に引きずりながら落ちてくる。固唾を呑んで見守る中、地上3 百米位でその航空兵は東の宮城に向かって挙手の礼をしながら近くの屋根の中に消えた。場所は東京中野の憲兵学校の校庭。見上げる私達五十名の尉官学生達の胸に熱いものがこみ上げて来る。『よく見て覚えておけ、素晴らしい精神訓話の材料だ』と指導教官は声高く叫んだ。三月十日の東京大空襲を予知することなく二月末に同校卒業、仲間7 名と共に任地の朝鮮憲兵隊司令部に赴いた。

私は中国満州に生れ育って就職、昭和一八年一月に北満のチチハル陸軍野砲連隊に初年兵として現地入営し、その後豊橋の予備士官学校に、続いて東京陸軍憲兵学校に尉官学生として転科入学、朝鮮で敗戦を迎えた。その為戦地での戦闘経験はないが、入営当時のチチハルの原隊は南太平洋のペリリュー島、アンガウル島に渡航展開、同期の初年兵及び教官達はほとんど戦死全滅した。豊橋予備士官学校の同期2 百名の中、五六名はそれぞれフィリピン、硫黄島、沖縄の各地で戦死、又憲校の仲間の一人は外地の俘虜収容所でアメリカ兵に牛蒡(ゴボウ)を食事に供したのを植物の根っ子を喰わせたとして言い訳が通らず俘虜虐待の罪で戦犯死刑となり当時話題になった。

私の赴任先の群山府では、敗戦の翌日朝鮮の人達が、「日本は負けた。俺達はこれで独立出来る」と韓国旗をかかげトラックを先頭に集団デモ行進(何人ぐ

らいでしたか、日本語でしたか) を始めた。これに対し私は、彼等韓民族の四〇年に亘る屈辱の歴史を思いやることもなく「日本人は敗戦でうち沈んでいる。同じ日本人だったのだから騒がないでくれ」と部下に武装させ、これを中止させた。又日本軍隊の中でも数人が脱走し、船を雇い日本に帰国しようとしたのを港で取り抑え、「日本軍隊の名誉を汚してはいけない」と原隊に戻したり、九月にアメリカ軍に抑留される時、それ迄下宿寄留世話になった人達に「若し辱しめをうける様な時にはこれを飲んで下さい」と毒薬(青酸カリ)を渡したり、抑留中、一緒に働いていた韓国籍の憲兵補に「このままでは韓奸としてやられてしまう、一緒に日本に連れて行ってくれ」と懇願されたのを断ったこともある。十月末、在留する日本人に何等挨拶することも出来ず先に帰国復員した。

僅か半年で一変した日本、話には聞いたが都市の惨状に言葉を失った。広島、神戸、大阪、名古屋、そして千葉。廃虚と化した日本。次々と引き揚げてくる復員兵士、海外在留邦人(その中に私の父や姉妹を失った家族もあった、住むに家なく、衣食共に欠く惨状、引き揚げ者は特にひどかった。毎日が生きるための闘いが数年続いた。

敗戦後の日本、アメリカ占領下での生活の中で戦争とは何か、兵隊とは、国民とは、権力とはと考えるうちに物の価値観が一変していった。人間は一人では生きていけない。家族を、集落を作り協同生活をする中で一地方を形成し、更にこれが一つの国となり、権力者が生まれる。当初は個人を守る為の集団が権力者の意向に振り回されることが多くなり、権力者同士の争いが、話し合いがつかず国家間の闘いとなり武力衝突に発展する。個人の生命はそれに振り回され、美化されもする。生物の中で人間だけが持つ悲しい運命(さだめ)なのだろうか。

日本は敗戦の悲しい結末から再び戦争を起こしてはならない。これに参加してはならないと平和憲法は苦難の中で生まれてきた。憲法九条はその誓いを国内は勿論世界に示したものだ。20世紀は世界中の各所で戦争が起こり数千万人の人間が死んだ。21世紀はこの轍を踏むまいと思っていたが、再び中東を中心に戦火は拡がりつつある。私達日本人の悲願、戦争のない世界を、どんなことがあっても守り抜きたい。これが私達日本人の信条である。(『大東亜戦争と私』私はその時憲兵だった)

(編集委員注)

この手記は、2004年に全日本年金者組合千葉市稲毛支部が発行したパンフレットに記載されていたものである。本人の了解をもとにここに掲載している。もう少し、具体的なこともお聞きしたかったが、ご本人は施設に入居されており、質問・回答も容易でない。よって、やむなく転載扱いである。

## 小高丑松さん証言（当時 20 歳、満州で兵役後シベリア抑留）

昭和 20 年旧制第二高等学校に合格したが、十九歳の秋に千葉県夷隅郡大原町（現いすみ市）で徴兵検査を受け、翌年の二月に兵隊にとられた。それまでは二〇歳で徴兵検査を受けていたが、戦争で多くの戦死者がでて兵隊が不足したので一年繰り上げられて十九歳の検査となり、多少体の悪い者でも戦争要員にされた。私の検査結果は第二乙種で兵役免除の丙種とのすれすれだったが、それでも駆り出されてしまった。

当時私は、旧制千葉県立大多喜中学校の五年生で株式会社日立製作所の柏工場へ学徒勤労働員され、そこで飛行機の直径 1cm 位のネジ部品作りをしていた。然し寸暇を惜しんで勉強し、1945 年 1 月 20 日に旧制第二高等学校理科に合格し、これから本格的な学問ができると喜んでいて矢先だった。それだけに「赤紙」が来たときにはどん底に突き落とされたような気持ちだった。

軍隊へ入って二～三日たったころ「遺書」を書かされた。いわば「死」への準備で、お前らは何時死んでもいいようにと人間を消耗品扱いにしていたのが当時の軍隊である。両親には「先立つ不孝をお許してください」、弟妹には「両親の面倒をよくみるように、勉強をしっかりするように」と遺言を書いた。1945 年 2 月 10 日市川市国府台の高射砲隊に入隊し、十日後列車で旧満州へ連れて行かれた。

それから約四カ月初年兵教育でみっちりしぼられ、これからは、多少古年兵並みに楽ができるかなと思っていたところ、日ソ開戦になり、暑いさなか毎日タコつぼ掘り（人間一人が入れる穴、この穴に入ってソ連の戦車が来たら手榴弾で応戦する）や実戦訓練に明けくれた。然し幸い戦闘はせずに終戦になった。

昭和二〇年八月一五日、その日私は、中隊長から司令部からの命令受領の指令を受け、カンカン照りのなか奉天郊外の陣地から市内の司令部へと満人の馬車に乗って向かった。私の他、古参兵 2 名が一緒だった。途中わが分隊へ立寄ったところ「今、天皇陛下がラジオ放送し、日本は無条件降伏した」と同年兵から聞かされた。まさに晴天の霹靂（へキレキ）だった。すぐ頭を駆け巡ったのは「生きて虜囚の辱しめを受けず、死して罪禍の汚名を残すことなかれ」の戦陣訓の一節だった。捕虜になるなかれ、ならば死ね、と教えこまれていただけに頭は混乱するばかりだった

それから約一カ月後の九月下旬、マンドリン銃（マンドリンの形をしていた銃）を持ったソ連兵にせきたてられ、「ダモイ（帰る）東京」と牛馬のように貨車に詰め込まれ、ソ連へと連行された。いわば「だましうち」にあったようなものだった。

着いたところは見渡すかぎりの大平原のまっただ中で、中央アジアカザフ共和国（北緯 50 度）カラカンダ市付近のチメルタウというところだった。夏も終わりの九月下旬満州を出発し、そろそろ粉雪が降り始める十一月初旬だった。その日から満四年にわたる抑留生活が始まった。

シベリア抑留を極言すれば、飢えと寒さ強制労働につきる。

軍隊での訓練は倒れんばかりのすき腹になっても相応の食事は用意され、空腹を満たしてくれた。然しシベリアでは常時スキ腹でひもじい思いの連続だった。朝食は飯盒の蓋にひとつまみの高粱（こうりゃん）や粟の飯、茶碗一杯位のスープ（塩汁にキャベツの切れ端が二つ三つ浮いているだけ）、夕食も殆ど同じもの、昼は黒パン三〇〇グラム、これが朝食時に分配されるので多くの兵士は分配時に食べてしまうので、昼飯ぬきで労働しなければならなかった。夏は作業場で水をのむ、冬はストーブを囲んで話で時を過ごす—こんな毎日だった。タマに小麦積み込みやじゃがいも掘り作業などにありつくるとじゃがいもなど隠して持ち帰ったが営門で没収された。夏になると野草を手当たり次第食べた。

こんな食糧状況だったので物々交換もかかれて行なわれた。時計、万年筆、鉛筆、フロ敷、日の丸の旗等でロシア人からは黒パンのみの交換だった。見つければ営倉入りなど処罰されるので「命がけ」の交換だった。

収容所は北緯五〇度位にあった。九月から翌年の四月までは冬、その後のわずか四カ月が夏。冬は零下三〇～四〇度になる。寒いよりは痛い。ボンヤリしていようものなら凍傷になる。そんな中でも作業はさせられる。カチカチに凍った大地にツルハシでの穴掘り作業はさながら鉄板にノミで穴をあけるようなものだった。仲間の一人が高熱をだしわずか二日で亡くなった。収容所の裏山へ仲間 10 人で埋葬した。旧軍隊の組織そのままの秩序であった。100 人単位で作業し、10-30 名ぐらいのグループに分かれた。ロシア人との交渉は全て中隊長がした。通訳がときどき作業場に来ていた。「明白はわが身か」と誰もがおののいた。このように私は戦闘こそしなかったが、遠い異国まで連行され、牛馬同然の如くに働かされた。そして、最も楽しかるべき青春時代をズタズタにされてしまった。その原因は言うまでもなく戦争にある。

1949 年 10 月 30 日、興安丸で舞鶴港に帰国した。父は「ご苦労さん、元気でよかった」と迎えてくれた。しかし、帰国したときは学制改革で二高は廃校になり、新制高校からやりなおし、大学卒業後司法試験に合格し弁護士となる。もともとの希望は文科であったが、当時文科は徴兵猶予がきかなかったのも、「徴兵逃れ」のために理科に変更した。帰国後、私は戦争反対のための特別な活動はないが、弁護士になってからは、人権擁護活動、特に再審事件を中心に活動し、その他の公害事件、自由法曹団活動に力を注いできた。

悲惨な戦争の反省にたつて新憲法が生まれた。ににもかかわらず、今また憲



法を改正して戦争のできる国にしようとすることは断じて許せない。「シベリアに抑留されて」一九二五年四月九日生まれ

## 志伊良正幸さん証言（19歳、暁部隊、大隈半島大根占）

<太平洋戦争中、就航船の88%が撃沈された>

1944年4月、18歳のとき、大阪の海員養成所に入所、尻にロープで叩かれた跡が消える間がないほど、今思ってもぞっとするような厳しい鍛えられ方を体験した。同年9月に6ヶ月間の教練を終えて、希望した大阪商船に入社した。機関部に配属され、灼熱のボイラーに石炭をくべる火夫見習いであった。

初航海はどこへ行くのか、どこの海域を走っているのか軍の機密で知る由もないが、先輩たちの囁きで26隻の輸送船が船団を組んで10隻の駆逐艦に護られて南方へ向かっていることが薄々わかった。航海中は交代で甲板に立ち、魚雷攻撃の見張りにつくことになっており、丁度私が見張りのとき、大成丸の右舷前方を進んでいた僚船に敵潜水艦の魚雷が命中、凄まじい轟音と共に真っ黒な煙・水柱・火柱、舞い上がる兼組農の姿・積み荷・船具の散乱、まるで地獄絵のような阿鼻叫喚を目の当たりにして身の毛がよだつ思いであった。それから各船は魚雷攻撃を避けるため之字運行（ジグザグ航行）に入ったが、敵潜水艦はなおも攻撃の手を緩めないため、船団はバラバラになり各船が別の行動をとるようになったようすが、その後、護衛の駆逐艦と僚船が次々と撃沈され、マニラに到着したのは僅か6隻だけと聞き驚いた。全日本海員組合の資料によると太平洋戦争中に2568隻、就航船の88%が沈められ、62000人の船員が命を奪われている。

マニラに4・5日碇泊、荷物（軍事物資）の積み下ろし後、単独航行で台湾の高雄へ寄港、次いで沖縄の嘉手納で、荷物の積み下ろし後、ジグザグ航行のため余分な日時を費やしたようだが東京芝浦港へ無事入港した。

1945年2月19日午前2時ごろ、千島列島最北端の占守島という島から他へ移動する兵士を乗せてオホーツク海を函館に向かって航行中、ドカーンという大音響とともにベッドから放り出され、船内が真っ暗になり、「援けてー、痛いよー、出られないよー、神様ー、お母さん、〇〇子ー」等々喚き叫ぶ声に後ろ髪を引かれる思いで、助けだすどころか自分が脱出するのが精一杯で、無我夢中でデッキまで這い出していくと既に救命ボートが下ろされていて5～6人乗っていた。早く乗れといわれて7～8メートルぐらいの高さの縄梯子を伝って飛び乗ることができた。

<天皇陛下万歳を叫んで沈んで行った先輩たち>

早く本船から触れないと渦に巻き込まれてしまうので必死になって櫓を漕ぎ漸く本船から離れ、ホッとする間も無く大成丸は、船首を空に突き上げ数分で船尾から沈没していった。そのとき「海行かば水清く屍、山行かば草燕す屍、・・・」と歌いだし、続いておこった「天皇陛下万歳」という叫び声が波間に消されていった、あの悲壮な光景は今でも忘れない。その後私はボートの上で気絶したのか、同日午前 7 時ごろ、気がついたときは、日高紋別の魚河岸で国防婦人会の人たちが焚き火で唾をとってくれていた。4～5 日民家に宿泊した後、小樽の生命保険会社の 1 室に軟禁された。約 10 日位で自宅待機が許され、その際憲兵から「各自家族の元に帰って行くが、諸君が経験したことや軍の行動について口外してはならない」と、緘口令を敷かれた。

兵庫県尼崎市から山口県徳山市へ疎僻していた家族と再会して喜んだのも東の間、2 ヶ月も前に入営通知が届いており、家族団らんどころか慌ただしく隣組の人たちの歓呼の声に送られて、愛媛県三島の暁部隊に入隊した。

2 ヶ月ほど初年兵教育を受けてから、大隈半島の大根占へ移動、そこでの任務は特攻艇（爆雷を積んで敵艦に体当たりするモーターボート）の保守・整備である。ところがボートの整備は殆どなく、実際にやった仕事は舟艇を格納するための防空壕づくりで、農家の人が丹精こめて育てた農産物や、牛、鶏など食糧の徴発をやらされたこともあった。

1945 年 8 月 15 日の玉音放送とやらは直接聞いていないが、終戦で少年特攻兵の悲惨な体当たりの姿を見ないで済んだのがせめてもの救いあった。舟艇を隠滅するため穴を掘って埋め、機密事務等の焼却後、夜行軍で宮崎県都城へ移動、武装解除され、復員や引揚者でござった返す列車で山口県徳山駅に降り立って吃驚仰天、空襲で辺り一面焼け野原、瓦礫の山と化した惨状に不吉な予感を抱きながら我が家のあった辺りを無我夢中で探し回っていたとき足元でトタンが持ち上がり年配の男性が出てきた。地獄で仏とはこのことか、「志伊良さんの家ならすぐ其処だよ」と教えられた所は防空壕に焼けトタンを被せただけのみすぼらしい有様で、其処に、両親と三歳上の姉を筆頭に弟二人、妹五人、そこへ私が加わって計 11 人がひしめき合うという酷い状態であった。激しい空襲で町中全焼したにもかかわらず、奇跡的に家族全員が無事だったことに、まずは安堵の胸を撫で下ろし、喜びを分かち合ったが、銃後の国民がこんなに酷い目に合わされているとは夢にも思わなかった。

当時 3 歳だった一番下の妹は空襲の恐怖症で、飛行機の音を聞くと耳を塞いで埒くまってしまう状態が中学を卒業する頃まで続いた。

太平洋戦争で日本は 200 万人に上る戦死者を出したと言われている。太平洋戦争の前、1931（昭和 6）年の満州事変から日華事変をへて、15 年戦争と言われている戦争の間、日本は海外に侵略戦争と植民地支配を続け、とくに中国や

韓国を始め、東南アジアの諸国に多大な損害を与えたという苦い歴史があり、また国内ではアメリカ軍の空爆で日本の主要都市が殆ど焼け野原になり、一般市民も巻き添えにされ、原爆投下で過酷な運命に曝されたのが、広島・長崎の一般市民であった。

志伊良家の先祖の地、沖縄県は唯一暮らしの場が戦場になり、悲惨を極めた深刻な事態となった。こんな無法で残酷な戦争とは知らず、聖戦と信じ込まされ、「大君の辺にこそしなめ」の大義の名のもとに「天皇陛下万歳」を叫んで海底に沈んでいった諸先輩のことを思うと腸が煮えくり返る思いで、残念でならない。

<非核・平和・沖縄県>

1995年（平成7年）6月に発布された、非核・沖縄県宣言は次のように述べている。戦争は無差別に破壊し尽す、すべての命を・生活を・文化を・歴史を・自然を、太平洋戦争最後の地上戦があったこの地、沖縄、町や村が焼かれ20万余が命を奪われた。祖先が築き上げた文化遺産は失われ、地形も変えた、その傷跡は今なお癒えない…後略、沖縄最後の決戦地、摩文仁にある平和記念館の展示室に「戦争を起こすのも人間なら、戦争を許さず止めようと努力するのも人間だ」と述べている。戦争は人間の行為のなかで最も残虐な行為です。戦争は絶対にしてはならないし、また、させてはならない。このような無謀で愚かな戦争の反省から二度と戦争をしないという誓いを立てた新しい憲法が出来上がった。特に第九条は世界に誇れるすばらしい条文である。

ところが、小泉政権の登場以来、有事法制制定を急ぐなど、急速にきな臭い匂いがしてきた。米軍基地を強化して自衛隊の海外派兵をすすめ、憲法を改定して武力を行使ができる道を目指して突き進んでいるようである。これは絶対許せない。

<うし（丑）年の決意>

う ウシろめたい：核密約隠しの日米安保条約は破棄する

し しっかりと：憲法九条生かし核兵器と戦争のない世界をめざす

と とんでもない：アメリカと財界のいいなり政治はやめて、「ルールある経済社会」を

し 正念場：「日本の進路」が問われる大事な総選挙の年

うしのように／ものごとを／よくかみしめて／よく反癖し

悲惨な戦争を繰り返させない／九条が一層輝く年に／オバマさん核廃絶は見事です／ついでに安保も破棄してね（1925年11月20日生（83歳））

## 田岸敏子さん証言（16歳、中国旧満州大連関東軍付属陸軍看護学校生徒）

私の家族は、父中谷義則が逓信省の電信技士であり、情報を扱っていたので軍属であった。母志可との間に、中国山東省芝罘（チーフと発音する）の町で次女の私を含む5人の娘をもうけた。私は、1930年に生まれた。この町は小学校が一つしかない寒村であり、娘を高等女学校に入学させるために、1941年私が小学校5年生のときに、大連に移動していた。

私は終戦当日、満州大連の関東軍第900部隊汐見隊付属の陸軍看護学生として勤務中であった。前日に8月15日に重大放送があるから、全員集合するよう指示があった。当日グラウンドに看護学生約200人、軍医はじめ職員約50人が集合した。私は大柄であったのでいつも列の先頭にいたから、ここでもラジオの前の方にいたが、放送の受信状態が悪く、ほとんど意味が聞き取れなかった。寄宿舎に戻ると友人が「日本は戦争に負けたみたいね」と教えてくれた。私は「日本が負けるはずがない」、「やがて神風が吹く」と教えられてきたので、動揺した。これから先どうしたらいいのか、不安が押し寄せてきた。当時、私の家族は山東省芝罘（チーフ）から錦州に移動していたので、1人で行けないし、そこは知らない土地であった。8月20日、看護学生はグラウンドに集合して、部隊長から看護学生には解散命令が出され、ねぎらいの言葉と気をつけて帰るように挨拶があった。そのとき、支給されたのは給料が振り込まれた貯金通帳だけだった。額は覚えていない。そして、職員が見送る中で、看護学校を去った。陸軍看護学校解散後、職員はソ連軍に収容されたと聞いたが、職員と患者の安否は知らない。

この看護学校は小学校の体育館を接收したもので、教室には小学生もいた。私達の看護学生は2期生であった。奉天、旅順、大連の羽衣、神明、弥生高等女学校から集められていた。私や両親は、戦争が負けるとか、早く終戦になるとか考えていなかったもので、大連の羽衣高等女学校3年生在学中、1944年3月に陸軍看護学生を志願したのである。高等女学校側も私に卒業免状をやると甘い言葉をかけていた。実際、高等女学校は陸軍看護学校に志願させれば学校の“成績”が上がった。私の女学校は5組あったが、2組と3組の担任がその競争をしていた。私は、その競争に巻き込まれたが、私が陸軍看護婦を志願した理由は、一つは、陸軍病院を慰問したときに、看護婦が白衣を着てきびきびと看護している姿にあこがれたからで、二つ目は、父も兵役免除で兵隊に行かず、家族は女ばかりであったから、私が国に奉公しなければならないと考えたからであった。実際、終戦間際に入学してみると、白衣は支給されず、白い帽子と濃緑色の上下服と兵隊が履く編上靴（へんじょうか）が支給されただけだった。靴の中に足が踊っていたが、不満を言おうものなら制裁を受けること覚悟しなければならなかった。ある日、その靴を座って磨いていたら、軍曹らしき兵隊

から「こら、貴様、天皇からいただいた靴を座って磨くとは何事か！」と厳しく咎められた。

やがて、B29 が高高度上空を飛ぶようになったので、病棟には幅 10m 奥行きは見えないぐらい長い防空後を兵隊と看護学生とが建設した。部隊は敵機を威嚇するために、木製の上空を睨むような偽装高射砲を 10 基ぐらい作ったが、私は「これで戦争に勝てるか」と疑問を持った。米軍による空襲はなかった。中国人が大勢住む中国の町には、米軍も空襲は出来なかったと思う。

この学校は急ごしらえの看護婦を養成する看護学校で、3 年間勉強を保証するものではなかった。それでも私達には、看護婦乙種の資格が取れると甘言で私達をだましていた。入学すると、寄宿舎の一部屋 5-6 人が一緒に生活した。朝 6 時に起床、点呼、食事、部屋の掃除、整列し、そこから、学校までの道を 2 列縦隊で軍歌を歌いながら 40 分徒歩で行進した。返事や歌の声が小さいと「小さい」と注意を受けた。高等女学校はそもそも裁縫と礼儀作法を学ぶことがひとつの目的であったから、大きな声を出すこと教育されていなかった。私は大きな声を出す練習をしていた。行進中、よく歌う従軍看護婦の歌は「砲筒の響き遠ざかり・・・」であった。学校につくと、午前中は衛生兵軍曹による一般栄養学、看護学、衛生学であり、午後は巻軸帯（包帯のこと）、三角巾、担架の実習だった。夏の炎天下の実習はきつかった。午後 4 時、歌を歌いながら部隊に戻った。寄宿舎に帰って、入浴、食事をすませると午後 9 時に就寝時間となった。ところが、上官は警戒心を身につけさせる口実であるが、半ばいたずら心で就寝時間中に非常点呼をかけるのである。こうして班毎に整列時間を競わせた。ここにも競争原理が持ち込まれていた。月に 2-3 回、非常点呼が行われた。軍医より下の階層序列は、兵長、伍長、婦長、班長、班付けとなっていた。看護学校といえども、軍隊であったから、上官に用事があるときは、ドアの前で大きな声で「〇〇教官殿に用事があって参りました」と来意を告げなければならなかった。夜勤は、学校から少し距離がある 2 階建ての隔離病棟の結核傷病兵の看護をする仕事であった。オムツも換えた。ベテランの看護婦が注射器に薬を充填し、看護学生に注射をさせるのである。やせ衰えた結核傷病兵の腕に皮下注射をするのは難しい。相手は軍人だから言葉使いは上品でなければならず「〇〇看護生徒注射に来ました。注射をさせてください」というのである。ところが、患者が生徒の「注射を要らない」と拒否する。私達は命令であるから注射をしなければならない。ベテラン看護婦は「相手は大根だと思って注射なさい」と教えた。患者の中には精神異常者もいたが、騒ぐ患者は大連の実家に帰した。首吊り自殺をした患者もいた。

父は 40 代で錦州の局長に昇進し、私以外の家族と一緒に暮らしていた。終戦 1 週間前には、仕事を通じて、戦局の変化を察知していた。婦女子を日本人収容

所に逃げるようにとの情報を家族に告げた。そして敗戦を迎えた。大連を占領したソ連軍の質は低かった。日本人を見ると「ダワイ、ダワイ」（よこせ）と言って、高価な品物を巻き上げた。ソ連軍の兵隊の腕には日本製腕時計が 5-6 個はめられていた。奉天では「女をだせ」と言って女性を強姦したらしい。父は通信機を抱えて収容所に逃げてきた。収容所ではソ連軍の指揮下で道路整備などの使役に日本人を駆り出していた。1945年12月のある日、元憲兵の人が「あなたの父は、朝起きてこないの見に行くと朝死亡していた。奉天神社の境内に埋葬してきた」と連絡してくれた。厳寒の満州で 30cm の土を掘り返すのは至難である。遺骨はない。父は頑強な身体ではなかったもので、寒さと過労で死んだのだろう。

私は満州にいたが、戦場を経験していない。平和だと思っていた満州の生活は、中国人の 15-16 歳の年少者を雇って雑役をさせていた生活であった。私は中国人を差別しなかったが、もとより日本人と中国人は平等ではなかった。私の家にも二人の中国人を雇っていた。少女はクーニャンと呼んだ。炊事、子守、水汲みの労働をさせていた。少年はシャオハイと呼んだ。彼らの給料は知らない。母は社交的であったので、町に駐屯していた兵隊を家に招いたりしていた。あるとき、小学校1年生の私は、何気なく置いてある数枚の写真を見つけたが、それは、中国人数人の首を板の上においてさらし者になっている恐ろしい光景であった。母は、兵隊が置いていった物だと言った。私は二度と見たくなかった。また、兵隊は「今度、馬賊退治に行ったら、宝石取ってきてあげるよ」と母に言ったが、母は「いらぬ」と答えていた。これは略奪を意味していた。よく、兵隊は「馬賊や匪賊を討伐に行く」と言っていたが、これが正体だと思えば日本軍はひどいことをすると思った。

1937年7月7日、盧溝橋事件が起こり、日中戦争（当時は宣戦していないと言う口実で“戦争”と言わず、国際世論と国民に対して、日支事変と報道していた）となったので、日本人居留民を一時日本へ疎開させた。私の家族は長崎へ一時帰国した。その後、情勢が安定したということで、満州の家に戻ると内の中はめちゃくちゃになっていた。兵隊が住んでいたのである。父が大切にしていたケース入りの本は中身がなくなっていた。私は、子どもながら、日本軍はひどいことをすると思った。

私は、大連の羽衣高等女学校に戻りたかったので、父の遠い親戚の川越茂春さんの家にお世話になった。戦後の数ヶ月は閉校状態であった。運動場はサツマイモ畑に変身していた。翌1946年に学校は再開したが、授業内容は戦争中とまったく変化した。毎日、ロシア語と中国語だけで他の教科はなかったから、1日2時間ぐらいであった。学校放課後、和菓子屋の店員のアルバイトをした。戦後の満州で和菓子を商売する人がいることは驚きであった。何でも闇で買え

るのだった。その後、奥さんが病気になったので、私は請われて住み込んで仕事、子守、家政婦として働いた。そして、1947年春に晴れて高等女学校を卒業した。引揚までここにいた。給金はなかったが、麦入り米のお粥が食べられた。

1947年1月中頃、大連埠頭から引揚船興安丸に乗った。しかし、乗船手続きに時間がかかり、雑炊を啜って待った。やっと、出航したが、玄界灘は波が高く、乗客は木の葉のように右左にゴロゴロと振り回されて、甲板では嘔吐をする人が多くいた。やっと、佐世保港沖から内地が見えて嬉しかった。しかし、手続きのために船が岸壁につけず、沖におよそ1週間停泊した。その間、船員が慰安会を開催してくれたので、非常に楽しかった。下船が始まると、内地関係者が「お帰りなさい」と迎えてくれた時は嬉しかった。佐世保の引揚者収容所でまた、1週間留められた。収容所では、害虫防除のために5-6人ずつ風呂に入れられ、その間衣服を消毒され、風呂から出ると白い粉末のDDTを頭からかけられた。収容所を出るとき、一人一人に3000円と引揚証明書が支給された。左胸に葉書大の引揚証明が縫い付けられた。

この年の2月1日はゼネラルストライキが予定されていたので、早く帰るように言われていた。当初、大阪駅から金沢駅、七尾駅は鉄道で、七尾から小木まで船便で、小木から布浦（鹿泊）のコースであったが、大寒で船は欠航していた。やむなく、大人の人とご一緒して、長い山道を雪の中を歩いた。靴の中に水が入り、足の感覚もなくなる冷たさであった。朝出発して午後遅く、大人の人たちと別れていよいよ1人で寂しくなった。雪景色の中に「松波小学校」の看板を見つけ、鹿泊（ししどまり）の部落に到着した。地元の人に我が家を教えてもらった。家の前に立つと、母が夕飯の準備で竈に木を入れている姿を見て、涙があふれてきた。ようやく家族と再会できた。家には独身の叔父の豊作さんと祖母、わが家族5人、大阪からの疎開者家族4人、私を加えて合計11人（数があいません、12人ではないですか？）の家族が住むことになった。叔父さんは漁師であったので、大きな魚は市場で売り、雑魚は私たちの食料となった。

戦後、母は石川県で借家を探し、力仕事をして家族を養った。仕事は珪藻土採掘現場で掘る仕事であった、三女も手伝った。母は子どもが大きくなると炭焼き小屋に1週間出かけて出稼ぎした。しかし、暮らしは貧しく、私以下の妹は義務教育だけで終わった。長姉は隣町の小木小学校代用教員を勤め、私は秋吉分教場の教員に採用されたが、そのうち男性教員が復員してきたので教員は退職せざるを得なかった。幸い松波町立森林組合に転職できた。働き手が増えて、ようやく1戸建ての家で、家族と一緒に生活することができた。（いつのことですか？）しかし、父のいない家庭であった。

私は大人になってから、千葉でPTA役員や民生委員を引き受け、教育や社会

に貢献することができた。

私は沖縄のひめゆり部隊の話を知ると自分と同じ境遇を感じる。傷病兵が水を飲みたいと言われて、彼女たちは壕の外に出て砲弾の犠牲になった。主人の軍属の長兄は輸送船で渡航中、潜水艦の魚雷で戦死した。戦争は絶対によくない。二度と戦争を繰り返してはならない。孫には戦場に行かせたくない。

## b. 内地

### 田中克己さん証言（19歳、陸軍少年特別幹部候補生、神奈川県鎌倉）

私は、19歳で志願し、1945年8月15日には陸軍航空通信部隊の教育隊に入隊した。1945年3月の東京大空襲で国分寺教育隊の兵舎が焼失したために、8月当時は東京津田塾大学の校舎に駐屯していた。この女子大学は勤労奉仕で学生もいないし、教授もいなかった。大学は空っぽであった。この場所で、いわゆる玉音放送を聴いた。雑音が多く、私は内容がつかめなかった。放送を理解した人は「日本は戦争に負けた」と言った。部隊の幹部は血気めいたことは何も言わなかった。私は軍国少年であったので、敗戦がどんな意味を持つのか不安であった。血の気の多い連中は日本刀を持ち出して、竹やぶに入り、やけくそになって竹をなぎ倒していた。噂では、水戸の長岡教育隊の一部の幹部は日本降伏に不満を表して、護国神社に立てこもったが初年兵は謀反に服従しなかったと聞く。私の部隊は8月23日までに、軍隊手帳、記録、日誌、教本などを焼却するよう指示された。占領軍に有利になるような証拠類を残したくなかったのである。8月23日になると部隊は解散した。20円が支給された。解散時に将兵が軍用品を持ち去ったが、私は毛布、電気メーター、タバコをもらって、千葉県館山の田舎へ帰った。

時代を遡れば、私は19歳で、陸軍少年特別幹部候補生を志願し、合格した。志願は教師や知人から勧められたものではなかった。本当は少年飛行兵に憧れていたが、試験で不合格となった。今になって考えれば、飛行兵になっていれば、戦死あるいは事故死していたかもしれない。命拾いをした。

さて、水戸の陸軍航空通信学校長岡分校教育隊に配属後、東京国分寺教育隊に転属となった。ここでは電波兵器の開発を担当していた。水戸にいた頃、水戸陸軍飛行場で警戒警報や空襲警報が発令されると、われわれは小銃、実弾、短剣の装備で1里先の飛行場に駆け足で応援に向かわなければならなかった。途中で警報が解除されると兵営に戻った。当時水戸飛行場に一機の戦闘機も無かったから、守るものは何もなかったのである。

演習は鎌倉稲村が浜で偵察機に標定機（敵味方識別装置）を積載して、飛行



させて訓練した。ある日、東京方面を空襲して航空母艦に帰還中の米艦載機編隊に向かって、飛行場蚰壺に入っていた兵隊が発砲した。艦載機の編隊はこの発砲に対して U ターンして機銃掃射を浴びせた。双方に人的被害が無かった。この兵隊は、発砲の命令が無いのに発砲したが咎めは無かった。通常、空襲に向かう敵編隊に地上から発砲したが、帰還中の編隊は見過ごしていたようだ。

演習に向かう途中で海軍の砲台設置工事が見られた。戦艦あるいは駆逐艦からはずしてきた大砲（艦載砲）を、海岸の崖に掘った穴に設置していた。岩をくり抜いたりしていた。工事に従事している海軍の兵士は作業服に竹筒の短剣を腰に下げていた。われわれ陸軍の幹部候補生は制服と鉄製の短剣を着用していたから、海軍の連中はみすぼらしく見えた。こんな海軍では戦争に勝てないと思った。

1945年7月頃、最初の外出日に許可された範囲を超えて、千葉県四街道小名木村の母親の実家に来て、母親の写真をもらった。急いで、兵営に戻ろうとしたが、千葉駅で空襲警報が発令され列車が動かなくなった。国分寺駅に着いた頃は帰営時間をとうに過ぎていた。困ったことになると思い悩んでいると、駅に私の班の兵隊が迎えに来ているのである。彼らは、私を列の中に入れて駆け足で兵営に入るといっているのである。後で聞いたことだが、帰営時間に遅れた私への制裁や班への制裁を避けるために、班の駆け足訓練を装って平穩に事件を解決したのであった。班長の知恵であった。

同年7月に千葉駅で二人の安房水産学校の同窓生に会った。彼らは県庁近くの水産会館に勤務していたが、先日の空襲で住居が焼失したので田舎へ帰るところであった。私が見た限りでは、千葉駅の周辺は焼けていない所もあったが、市内中心部は銀座通り、京成千葉駅、中央公園まで焼け野原であった。この空襲こそ、7月7日の千葉市大空襲であった。6月10日の空襲は知らない。

終戦になって、故郷に向かう列車の窓から焼け野原の東京を見た。千葉駅で待つ時間があつたが、乗客はほとんどいなかった。東京湾に沿って列車は走つたが、昔のように防諜を理由に窓のブラインドを閉めなくともよかった。館山の景色をみて、平和を実感した。

戦後、自分の体験から平和を守る運動に進んだ。しかし、当時読売新聞の記者をしていた父親は私の活動を理解しなかった。父親こそ、戦後の大きな歴史の転換を理解していなかった。それほど、戦前の皇国主義軍国教育は人間を深く捉えていたのである。私は、戦争で死なずに、生涯平和運動を貫いたことを誇りに思う。

## 田村清市さん証言（19歳、予科練一等飛行兵曹、小松海軍航空隊）

1945年8月15日の終戦放送は石川県七尾航空隊で聞いた。飛行場建設作業は中止された。予科練（注）約300人、村人約100人がオンボロの1台のラジオの声を聞いた。私は、雑音が多いので放送の内容はほとんどわからなかった。よく注意して聞いていた班長が「戦争に負けたよ。天皇が戦争をやめるとよ。」と泣きながら、みんなに説明した。集まっていた予科練たちは茫然としていた。司令官は自決した。何のための自決かわからなかった。本来、自決する前に、これまでの経緯を説明して、部隊の解散はどのように実施するのか、また、いかなる責任があるから、自決するのかを述べるべきである。そして、司令官自決後に残った幹部将校たちは、すぐに利己主義な行動に走った。将校は乗用車で、軍事物資を積み逃げてしまった。次の班長クラスの幹部もトラックに軍需物資を積んで逃げてしまった。軍の物資を私的に持ち帰ることは横領である。班長は、われわれ予科練に3000円ずつの現金と各自の貯金通帳を渡して、酒保には酒を置いて行くが、各自、家に帰るようにと言い残した。われわれ、指揮命令系統が切れた下士官クラスの予科練は烏合の衆であった。目の当たりに見た将校連中の豹変ぶりに呆れて、腹が立っていた。8月30日まで、みんな悔しい酒で酔っ払った。海軍の施設だったから、食糧（米と肉など）や酒（ビール、ウイスキーなど）は豊富にあった。私は、9月になって郷里に帰った。途中、山陰本線の江ノ川に架かる鉄橋が流されたために、そこから島根県那賀郡旭町（現浜田市）の実家まで重い荷物を背負って歩いて帰った。山陰地方は1943、1944年、1945年と毎年台風で洪水に襲われていた。戦争政策のもとで国土が荒れていた。

私の家族は、両親と合わせて10人であったが、妹の出産時に出血多量で母子とも死亡した。末っ子の私を育てる母親が死亡したために、母の姉で子どものいない夫婦に養子としてもらわれた。しかし、私が小学校6年生のときに、養母が失踪したので、島根県に戻り、カナダの兄の送金と勧めで東京に出た。豊島師範学校に合格したが、戸籍の手続きが遅れたために入学できなかった。やむなく、昼間は働き、夜間の学校で勉強することになった。

そもそも、私が予科練に志願したのは、東京の法政大学高等学校電気工学科（夜間部）3年生のときで、後1年勉強を続ければ卒業できる年であった。学校は九段の近くであったから海軍、陸軍の本部から狙われていた。われわれ工業学校生徒に、それぞれ、海軍予科練と陸軍少年飛行兵志願を盛んに勧誘した。私も、国のために尽くすのは戦争で戦うことだと信じて、18歳で予科練を志願した。当時、昼間は千代田電線会社（古河電工の子会社）で働いていた。会社は、工業学校を卒業しても5年間はその会社に残るという約束で奨学金まで支給され

ていた。しかし、卒業もせず、勤めもせず、予科練に入るのは約束違反であったが、会社は国の戦争政策に異議を唱えることはできなかった。

勇んで入った予科練は期待を裏切った。1944年9月、横須賀鎮守府に赴き、試験合格通知を受け取り、奈良県の海軍奈良航空隊に配属された。奈良航空隊は天理教本部の施設を接収したものであった。私は38番目の施設に入った。朝6時起床、駆け足、朝食、学科授業、18時夕食、自由時間、21時就寝と決まった生活が強いられた。海軍は班を二つに分けて、交代で仕事をさせた。朝、食事を用意する組と駆け足の組に分ける。交互に繰り返す方式である。日曜日の外出許可もこの方式である。一つの学科はゼロ戦模擬操縦訓練である。実際のゼロ戦はないので、操縦席と根元だけの主翼（尾翼はなかった）が設置されており、操縦桿を引いたり、押したりすると補助翼が動いて、表示板に機影が上下するシミュレーション装置であった。しかし、これも3台しかなかった。教官は、機体を上手に上下させないと、指揮棒で予科練を叩いた。二つ目の学科は爆弾投下訓練であった。これは、講堂に幅3mで長さはおよそ30mのエンドレスに巻いた地図をモーターで移動させ、予科練は5m程高さの台から、後ろに羽が付いて、先を尖らせた金属棒を落として、移動する地図上の投下目標地に当てるのである。遊びのようだった。三つ目の学科は、モールス信号の送受信である。ところが、教え方が精神主義であった。毎日、一つのカタカナ信号を覚えさせた。48カタカナ信号を48日かかって覚えるのである。これを当時、ドイツ式だと言っていた。カタカナ信号はまだ覚えている。トツーはイ、ツートツートはロ、ツートトトはハである。数字は忘れた。一人一人に音の出ない打電練習機を与えられた。試験時は音が出た。私はドイツ式音感教育が苦手です。50点満点で38点であった。無意味な数字を使ってモールス信号により宝塚の海軍部隊（編集者注、新藤兼人監督の「陸に上がった軍艦」で有名な部隊）と交信訓練をした。電波事情がとても悪かった。電気部品が劣悪であったと思われる。実戦では、敵に傍受されてもいいように暗号で送るのであるが、そこまでは行かなかった。四つ目の学科は、グライダー操縦訓練である。エンジン付の飛行機はすでになく、グライダーも5-6台しかなかった。これに訓練生を乗せると、予科練が人力で引っ張り上げるのである。これでは数メートルしか上昇できない。実戦の訓練にはならなかった。上級生には生駒山の頂上部に造成された滑走路からトラックに曳かれたグライダー操縦訓練があったが、私まで順番が回ってこなかった。数学は分数計算があったことを覚えている。国語は夏目漱石の「坊ちゃん」や「こころ」取り上げていた。歴史は、織田信長や豊臣秀吉が登場する戦国時代の話であった。英語はよく覚えていない。ただ、バケツのことを「オスタップ」と呼んでいた。理科も覚えていない。音楽はなかった。しかし、みんなが好きな歌は「予科練の歌」であった。当時、「ここはお

国を何百里、離れて遠き満州の赤い夕日に照らされて」と言う歌は古い歌扱いになっていた。祭日は紅白饅頭が出て、君が代を歌った。海軍なので、船でなくとも、廊下掃除は甲板掃除と言われた。朝方、3人の横並びで、濡れた雑巾を両手で押さえて長い廊下を拭いた。風呂は週に3回利用できた。夜の自由時間は2時間で、21時になると就寝時刻であった。暴力行為の根源は海軍棒で尻を殴ることであった。班長室に行くと、野球のバットに似た棒が、班長の数だけぶらさがっていた。柄のところに軍人精神注入棒とV1からV30との文字があった。ドイツのV1ロケットから取った名前で、この棒は桜の木で出来ている。樫の木は硬いが折れやすいので使われなかった。この棒は班長が予科練に削らせていた。ただ、海軍には陸軍のように上官が顔面を殴りつける制裁はなかった。奈良航空隊から石川に行く途中、片山津温泉近くの柴山湯でカッターの訓練をしたが、飛行機乗りの訓練ではなかった。その後、1945年1月ごろ、山形の天童飛行場建設に派遣された。そこが終わってから、石川県能登？飛行場？建設に回され、そこで終戦になった。

私は、予科練15期生であったが、航空隊には14期生がほとんど残っており、13期生はまだ半分が残っていた。つまり、航空機を失い搭乗員が余剰になっていたのである。13期生は「沖縄で多数戦死した」と言う話は聞いた。我々15期生の戦死はほとんどない。石川県小松航空隊でもゼロ戦はすでに配備されており、仕事は滑走路の建設であった。もう授業はなかった。外出時のみ、予科練の制服を着た。当時は、機動力がないので全て人力労働で行われた。山を掘った土をトロッコで田んぼを埋めるのである。この作業を眺める農民がいた。滑走路建設とは農民が長い間、耕してきた畑や水田を壊すことなのである。さらに七尾航空隊から山形県天童飛行場建設に派遣された。宿舎として地元の小学校があてがわれた。建設作業は8時から17時まで従事した。滑走路の仕上げの仕事は、海軍工廠からトラックで、舗装に使用する木製の厚板（厚さ約5cm、幅約30cm、長さ約5m）が届けられ、1kmの滑走路に敷き詰めるのである。表面に凹凸があっても、ぬかるんでもゼロ戦は離陸できなかつたからである。

私は、予科練であったが、搭乗すべきゼロ戦は存在せず、実際の機体に触れることもできなかつた。おかげで命拾いができた。小松飛行場で数機の機影を見たことがある。その飛行場には敵の目をごまかすために、ベニヤ板で拵え、金属色に塗られた偽ゼロ戦が40機が敵の目の触れるところに設置されていたが、アメリカはそんなものを相手にしなかつたから、破壊もされなかつた。

法政大学工業学校時代は恵比寿の会社寄宿舍で生活していた。ある日、寮の小母さんが「今日、警察の人があなたの部屋を調べて行ったよ」と教えてくれた。部屋は荒らされた後が残っていた。当時は、特高警察が国民の思想を取り締まっていたので、会社の先輩は私に「寮に変な本をおくなよ。もしあれば、

始末したほうがよい。」と親切に注意を受けていたが、本当になった。警察官は本と手紙を調べていたらしい。私は、当時左翼関係者の知り合いがいなかったもので問題にならなかった。不在時の家宅調べは 2 回あった。これは、古い工員の人たちが、仕事のことで半日ストライキをやったためらしい。

戦後、田舎に戻った 1947 年、農地改革がなされる前に旧和田村にも石州農民組合が結成された。私は字が上手であったので書記に推薦された。この運動を通じて、私も社会に目覚めてきた。地元の農民組合は戦前から、人望があった大学出の豊島五郎率いる小作組合は地主に小作料の軽減を求めて果敢にたたかったが、指導者が逮捕されて運動が鎮圧された。戦後、青年団の活動にも参加した。会には兵隊上がりの農民組合長の酒井喬の人望が熱かった。そして、「民主青年同盟」を町に設立した。彼は、召集された前に、当時読むことを禁止されていた本を地下の穴に埋めたと聞いた。私は文化部長に推薦された。

戦争は馬鹿げている。国のために勇んで予科練に志願したが、終戦時の幹部の体たらくを見てがっかりした、そして腹が立った。昨日までの言動を 180 度、豹変させたのである。1944 年 7 月 15 日に私は、広島県呉から貨物船に乗って出発する 34 歳の兄力太郎を見送った。しかし、戦後の戦死公報によると次兄は、私と別れた 7 月 16 日にフィリピン沖で戦死していた。長兄弥三郎はカナダバンクーバーに出稼ぎに行っていたが、日米開戦になり、奥地の日本人抑留所に収容され、盲腸虫垂炎で 1943 年 9 月 24 日、死亡したと外務省から通知が届いた。父は、相次ぐ長兄の病死と次兄の戦死にがっかりして、自宅で亡くなった。

戦争を繰り返さないためにも若い人たちと一緒に話したい。

(編集委員注) 海軍飛行予科練習生

予科練は海軍飛行予科練習生が正式名称である。戦争末期の航空特攻隊の名による自爆攻撃の搭乗員は予科練出身者から構成された。特別攻撃隊は志願制であったが、半ば強制的に「志願」させられた。特別攻撃隊は搭乗員からの提案ではなく、大西滝次郎中將（第一航空艦隊司令官の提案で大本営海軍部と連合艦隊の了解のもとで、1944 年 10 月レイテ島沖海戦から採用された。陸軍は陸軍特別操縦見習士官出身者からも特攻隊は編成された。戦闘能力を発揮するためには、指揮官は操縦年数 5 年、飛行時間 2000 時間以上必要で、僚機搭乗員では操縦年数 2-4 年、飛行時間 600-1500 時間以上必要であるにもかかわらず、特攻隊員の多くは操縦年数 1-2 年、飛行時間 300-600 時間であった。(倉田富士雄著「自由への代償」から引用)

### 三宅勝利さん証言（24 歳、海軍滋賀航空隊第 9 分隊）

私は、1943 年に千葉師範学校男子部を卒業した。教員に採用されたが、当時は国民全てに、兵役義務、納税義務、教育義務が課せられていた。兵役でいえば、師範学校卒業者は短期現役と言う制度があつて平和時なら 1 年で終わった。しかし、戦争に突入すると兵役が延期されて、名称も予備学生となった。これは海軍兵学校に順ずる扱いになっていた。不足した海軍士官要員を確保しようとしたからである。

当時の家族構成は、両親、兄、姉 3 人と独身の私の 7 人家族であった。父は、大学病院で細菌検査などの技官であった。兄は丙種合格で兵役から免除されていた。

私は、1942 年徴兵検査を受けた。1945 年に海軍に志願し、まず、横須賀海軍鎮守府竹山海兵団の師範徴兵部隊に配属され 3 ヶ月間、基礎的訓練を受けた。ついで、4-7 月の間、大津の滋賀航空隊第 9 分隊に派遣された。ここで、基礎的訓練を受けた。1945 年 4-7 月に私が大津の航空隊にいた頃、上空を京都方面に 100 機以上の B29 編隊が飛行して行った。京都も爆撃されなかつたので大津も爆撃しないのかと思っていた。この B29 編隊は大阪大空襲の任務であった。1945 年 7 月海軍として、米軍の上陸作戦に対抗する検討が始まった。神奈川県茅ヶ崎の結核病院「南湖院」を接収した部隊に配属された。私は、航空隊で飛行要務兵科なのに航空機はなかつた。民間の航空機軍需工場へ行って、徴用労働者の監督の仕事が予定されていた。

教科では、作戦・戦訓、モールス信号、手旗信号、大砲の撃ち方、火薬の扱い、海軍体操などがあつた。モールス信号は 1 分間に 60 文字送信、受信できなければならず、少年兵たちは苦勞した。民間の通信学校でもその程度になるまでに 4 年を必要としていた。それを 1 年で習得させるためには、毎週試験をし、成績の悪いものには、海軍式のバッテリーで尻を殴った。壁に両手をつかせ、尻を後ろに出させて、そこを両手で持ったバッテリーで殴ると激痛が走る。少年兵たちが風呂に入る時、青あざの打撲傷の尻を見せていた。予備学生は士官候補生であるので、バッテリー制裁は行われぬ。私の場合、通信科専門でないので、モールス信号は 1 分間 40 字でよかつた。私がある夜、靴の踵を踏みながらトイレに向かうと、武道専門学校出身の隊長に見つかった。「貴様、それは何だ」と難癖をつけられ、竹刀で背中を強打された。

海軍は陸戦を想定したものでないので、陸戦に力点を置いていなかった。実際使える武器がないので、陸戦の方法は地雷を抱えて敵戦車に突入する挺身攻撃しかない。戦訓教科の理論講義では、アメリカの上陸用舟艇が、何隻、何メートル間隔で並び、速度はいくらで攻撃してきた場合、我が方は何メートルお

きにトーチカあるいは速射砲を何基設置しなければならないか、トーチカの視界は何度でなければならないかという問いを出しながら、方程式の回答は現実と程遠いものであった。現実には、トーチカはなく、速射砲もパラパラしかなかった。

1945年8月、終戦の約1週間前に夜間スピーカーで非常招集を受けた。東京湾に敵潜水艦が東京湾に潜入したと言うのである。私たちは、陸戦の訓練を受けているわけではなく、潜水艦と戦う武器があるわけではなく、不安に思った。全員、日本刀を持ってトラックに分乗した。横須賀付近の海岸に到着しても何の指示もなく、夜の砂浜で星を見て過ごした。俺たちは、今後どうなるのだろうと考えさせられた。やがて帰営した。後から、この話は夜光虫と潜水艦を見誤った誤情報によるものであることがわかった。

海軍と陸軍の相違の私見を述べてみたい。私は海軍に2年しか体験していないし、陸軍は体験していないが、この二つの軍隊の大きな差を知ることができた。

海軍は合理的である。陸軍は硬直した考えである。海軍の戦争で守る対象は、日本の民族であった。軍人勅諭も陸軍ほど重視していなかった。陸軍は天皇のために戦うと教えるのである。海軍では、天皇が何かをした時も親しい仲間同志では「天ちゃんが」と言っていた。陸軍では、歩兵銃は天皇から下賜されたものだから、毎日の手入れを怠ると制裁を受けた。海軍では銃は1週間ぐらい整備しなくても制裁はなかった。陸海軍とも銃に、菊の紋章があった。海軍の大砲の手入れも毎日なかった。海軍は合理的なのである。海軍はそもそもイギリス海軍を模範にしており、戦争中も敵性語として、英語の使用を禁止していなかった。たとえば、カッター (cutter 小型舟艇)、タラップ(オランダ語 trap はしご段)、オスタップ (washtub 大きなたらい)、スペア(spare 予備)はそのまま使用されていた。トイレは海軍でも「厠 (かわや)」と呼んでいた。海軍はラジオ体操のようなリズムカルな柔軟体操 (デンマークに源流) 出会ったが、陸軍は兵式体操であった。海軍は階級性を重視したが、同時に専門職を尊重した。たとえば、尉官が武器を使用する場合、武器庫を管理する下士官に対して、「願いやす」と丁寧な言葉使いであった。陸軍は階級一辺倒であった。しかし、海軍上官は貴族主義的な雰囲気を持っていた。上官は兵と一緒に食事をしなかった。時にはナイフとフォークを使用していた。海軍は、息が抜けるゆとりがあった。私たちは50人ぐらいが共同生活をしていた。夜間点呼の後に「煙草盆 (兵舎の外に設置された煙草盆の場所) 出せ」と合図があると、兵舎から外で自由な行動をしてもよいという時間であった。また、夜間、西洋音楽が流れた。後でわかったことだが、枢軸国オーストリア出身のヨハンシュトラウスの曲であった。上官がいない時は、消灯後に、誰かが「宮本武蔵をやれ！」と叫ぶと、

灯火に囲いをつけた下で、指名された者が、吉川英治作の宮本武蔵の小説を 20 分程度朗読した。ゆとりもあった。

1945 年 8 月 15 日の前日、「翌日重大放送がある」と告げられた。私は、ソ連軍参戦に対する宣戦布告か、あるいは急転直下戦争を終結するのかと想定した。当日、司令部前に全員約 200 人が整列させられた。スピーカーから流れる天皇の音声は雑音でほとんど聞き取れなかったが、「しのびがたきをしのび、耐え難きを耐え」の文言を聞いたとき、戦争が終わったと思った。放送後に一瞬の静寂があったが、東京帝大卒の男がすくっと立って、にやりと笑い、駆け出していった。私は、「こいつ！」と彼の態度をよからぬものと思った。多くは態度を表明できず、ただ呆然と思考が停止していた。翌日、隊列を組んで相模川河口の海岸まで行進した。そこで、引率の海軍中佐が「君たちは、まだいいよなあ」とつぶやいた。戦争が終われば職業軍人は仕事を失うが、予備学生は社会で仕事ができるからであった。私は「女々しい」と片付けた。二日後に、降伏に従わない厚木航空隊は私たちに同調するよう求めてきた。海軍当局は、謀反は許さない立場から、厚木の園田司令の影響力を分断した。厚木の航空隊は抗戦を主張するビラを撒いたが、同調者はいなかった。解散の訓示は、茅ヶ崎分隊の責任者尾崎大佐司令が述べた。覚えていることは「日本はこれから食糧難の時代に入る。諸君は果実のなる木を植えるように」だけだ。滋賀航空隊から、被服などの物資を授与するから取りに来いと言う通知が来たが、これを無視して横須賀の海兵団に移動した。横須賀に着くと、尾崎司令が割腹自殺を遂げたとするニュースが伝わってきた。ここで、帰郷準備に入った。

私は、教員になることが目標であったが、航空隊の予備学生は特別攻撃隊の要員として位置づけされていた。1944 年 4 月沖縄方面に展開された菊水 2 号作戦の場合、海軍兵学校出身の正規士官 7 柱、予備士官（大学、高等専門学校卒業生）78 柱の割合で特攻死を出した。菊水作戦だけで 10 号もあった。この割合(注)は全ての作戦を通じ同じであったと思われる。

戦後、私は師範学校卒業であったので、現職現役の制度から、元の教員に復帰できた。千葉師範学校附属小学校が千葉市空襲で焼失したので、四街道町の兵舎に移転していた。師範学校附属小学校の教員辞令は文部省が管轄していたが、事務が停滞していたらしく、辞令交付は 1947 年 6 月であった。その間、千葉県が給与を補償してくれた。そこへ、千葉市に進駐していた進駐軍民生部の若いブラウン部長（文官）が学校を視察した。半年後、私は千葉県庁の脇にある民生部本部に書類を届ける出張があった。偶然にブラウン部長と視線があった。部長は私を呼び止めて、肩に手をかけ「あなたは戦争の経験があるか」と片言の日本語で質問した。私が「海軍の航空隊です」と回答したら、彼は「おう、カミカゼ！」と言って肩をすくめた。さらに、コーヒーを飲もうと誘って、



自らコーヒーを用意した。私は、これには驚いた。日本だったら占領地で住民を見下して、威張っていたに違いない。アメリカは余裕のある国だと直感した。これには、「やられた」と苦笑を禁じえなかった。

戦後の教育は戦前と同じであってはならないが、当分戦前の教科書が用いられた。しかし、国史と国語教科においては、天皇賛美、国家主義、戦争の武勇伝などの記述箇所は墨塗りされた。文部省から何ページの何行目から何ページの何行目まで墨塗りの指示があると、それを教室で生徒に作業させた。この教科書は当分の間使用された。

教師として、生徒を見ているといろんな発見があった。千葉市下志津の旧陸軍演習場は旧軍人らに開拓農地としてあてがわれていた。土地の農家で師範学校の守衛の子どもは食料不足の折でも、白米の弁当を持ってきたが、元陸軍大佐で農開拓者の子どもはサツマイモ 5-6 本の弁当であった。父兄面接で会う元高級軍人の奥さんの手は、あかぎれやしもやけで荒れていた。「世が世ならば・・・」を思わせる変化が見えた。

戦争は繰り返してはならない。勝つ見込みがない戦争を始めることは愚かである。この戦争は社会の上に立つ人にとって見通しが立つはずだ。海軍連合艦隊の指令長官である山本五十六氏が出陣に当たり、時の総理大臣近衛文麿公に対し「1 年間は存分にあばれて御覧に入れますが、その後の收拾はお願いします」と申して戦場に赴いた。今にして思えば誠に残念である。

(証言者注)特別攻撃隊史、財団法人特攻隊戦没者慰霊祈念協会による

### **白井進さん証言（15 歳、陸軍幼年学校、大阪府南河内郡千代田村）**

1945 年 8 月 15 日、私は当時 15 歳で大阪府南河内郡千代田村にあった大阪陸軍幼年学校に在籍中であつた。当日の正午、真夏の太陽が灼熱の光を投げ掛けていた広い運動場に集まり学校長から終戦の旨を告げられた。「神国日本は絶対に負けるようなことはない」と信じていた軍国少年達は一時呆然としていた。その内周囲の戦友（陸軍幼年学校では学友をこう呼ぶ）がこもごも叫んだ。

「畜生。日本はなぜ負けたんだ」、「おれは最後まで戦うぞ」、「おれたちのがんばりが足りなかったから負けたんだ」、「天皇陛下に申し訳ない」等々。

中には腰の短剣を抜き、「おれは腹を切って天皇陛下にお詫びする。」と言いつくす戦友もいた。学校長は「君達の気持ちは分かるが、追而指示あるまでは待て。軽挙妄動はしないでほしい」と訴えた。多くの戦友はその場でいつまでも号泣していた。夜になって再度運動場に集まり、学校長から訓示があつた。

「日本は残念ながら無条件降伏した。米軍は明日にでも紀伊半島から上陸する

かも知れない。諸君らは帝国陸軍の軍人であるので彼らに何をされるか分からず、生命の保障もない。日本の将来を託する諸君に取り返しのつかないことが起きれば天皇陛下に対して申し訳ない。本日夜半になるべく軍人の格好をせず、ひそかに周囲に気付かれないように学校を出て故郷か身内のところに帰り給え。日本がどうなるか分からないが、日本民族は優秀であり滅びることはない。米軍の占領が終わったあと日本は自らの力で蘇らさなくてはならない。そのためには諸君達の力が必要になる時が必ず来る。その時までなるべく目立たないように隠忍自重して力を貯えておくように心がけられたい。何年先になるか分からないがこの千代田台上で笑顔での再会を期して頑張ろう」との趣旨であった。

その晩夜遅く一人一人が少ない食料と衣類をもって野山を越え近い駅まで歩いて朝方に大阪から汽車に乗り、東海連線が米軍の艦砲射撃で不通のため中央線を経由、二日かかりで千葉に帰った。千葉の町は9割方焼け野原であった。私の家は例外的に残っていたが誰もいなかった。

私は止むを得ず市原の山の中にある父方の本家に行くと、そこに家族が疎開しており安堵した。翌日から約3カ月私は目立たないように祖父の百姓仕事を手伝いながら暮らした。炎天下での慣れない百姓仕事は大変疲れたが、それでも作物が日に日に成長しているのを見ると生きている実感が湧いて来て、それなりに充実感を味わった。田舎にも進駐軍が来たが私の身には何事もなかった。

年末近くに千葉の家に戻ると、私が幼年学校に入る前の中学校の担任の先生が家にまで来て、「軍関係に行っていた友達が多くもとのクラスに戻っているので再入学するように」と誘われた。本も読まない生活が続いていたので早速中学校の4年（旧制）に復帰することにした。

学校では多くの懐かしい友人に再会した。家が焼かれバラックに住んでいた友人も多くまた食料も乏しく殺伐としていた。戦争中軍国教育に熱心だった数人の先生の追放のためのストライキが終わった直後でもあり、混沌としていた。授業も殆どの教科書が墨でぬられ、教科書の体をなしていない本で勉強した。とくに公民の時間では、先生は民主主義について何時もリンカーンの有名な言葉「人民の、人民による、人民のための政治」をオオム返しに話すだけだった。生徒から「天皇の、天皇による、天皇のための政治はどうなったか？」との質問には「教育委員会からの指示がないので答えられない」とのことで回答にならず、生徒の間で先生はあてにならないからみんなで考えようとのことで、そのまま「民主主義日本では天皇制は存続か廃止か」の討論会に発展したこともあった。

翌1946年1月、私は生涯忘れられない集會に中学校の弁論部担当の先生に誘われて弁論部員全員で参加した。それは日比谷公園で開催の「野坂参三帰国歓迎国民大会」であった。戦前に世界の共産党の指導部コミンテルンの執行委員

であった彼は、戦争中は中国共産党の毛沢東と共に対日反戦活動をしていた。この大会では彼は国民的英雄として会場の数万の人々から熱狂的な歓迎を受けた。

その集会では社会党・共産党両党の委員長のほか戦争中治安維持法で永年牢獄にいた多くの活動家や、学者、文化人、映画俳優など多数の人が参加していた。

私はあの戦争中に敵国中国で中国共産党指導者と手を携えて反戦運動をしていた日本人がいたことに大変驚き、なんともいえない大きな衝撃を受けた。

彼はその経歴からは想像もつかない穏やかな口調で「これからの日本の民主化は人民多数で作らねよう」と話した。彼は日本が再び同じ過ちを犯さないため戦争犯罪人を厳しく追求しようと訴えた後、宮城を指差し「最大の戦争犯罪人はこの奥にいる天皇です」と静かに言った。参加者からは大きな拍手があがった。戦争中軍国少年として毎朝皇居の方に向い敬礼し忠節を誓っていた私はショックのあまり呆然と佇んでいた。

更に心に残ったのは俳優の薄田研二が読み上げた日本におけるマルクス経済学の始祖の川上肇先生からの詩のメッセージであった。川上先生は治安維持法による長い牢獄生活により病にたおれ、当日は病床に付しておられ参加出来なかった。当時先生は 67 歳であった。

「同志野坂を迎えて」

同志野坂ついに帰る

正にこれ百万の援軍

.....

われもし十年若かりせば

菲才われもまた

筆を引っ提げ身を挺して

同志諸君の驥尾に附し

澎湃たる人民革命の

滔天の波を攀じて

共に風雪を叱咤せんに

この詩は戦前日本の民主化をめざし、命がけで戦った野坂氏と川上氏の長い間の友情と熱情がほとばしる詩であった。私は今でも戦後の疾風怒涛の時代を思い出す時に思い出す詩である。

この日の集会について当日集会に参加した米国の著名なジャーナリストのマーク・ゲインはその著書『ニッポン日記』で集会についてこう述べている。

「これは超党派的な会合で右翼の連中が共産党の連中の隣にいた。」「共産主義者でない人達の間になぜこんなに野坂が人気があるのか？ 今の日本は極端な指導者の貧困で、日本人たちは政治的色彩などおかまえなしにどんな指導者にもくっついて行くかも知れない」

1947年10月23日。この日も私の人生の転機となった感激的な日であった。

高田馬場駅前の広場には数千の早稲田の学生が集まった。戦前初代労農党委員長の大山郁夫教授の米国での亡命16年の後、学生の強い要望で帰国したのを横浜埠頭まで出迎えて歓迎する自発的な集会であった。学生達の熱烈な歓迎の中で彼は情熱的に話した。

「われわれは国の内外の反動勢力と戦わねばならぬ。」と宣言した後「民族の解放と民主革命の急務」を訴えるとともに「中国、朝鮮、インド、ベトナムなどアジア民族の独立と日本との友好がアジアと日本の今後の進路である」と強く訴えた。その時彼は67歳であったが、年を感じさせない若さと情熱を感じた。その後米国により朝鮮戦争やベトナム戦争が起されたが先生の先験的な識見がうかがわれる言葉として思い出す。1950年に単独講和条約と日米安保条約締結の動きの最中に私は先生の政治学の講義を受けたが、授業のあと「今日本は重要な岐路にある。私は国会に抗議をしに行くがついてくる学生は一緒に行こう」と言われた。学問と行動が一致している先生の態度に感激した。

大山郁夫先生は戦前1929年悪名高い「治安維持法」の国会通過の際、唯一の反対議員であった労農党代議士で同志社大教授の山本宣治が時の政府の意向を体した右翼の凶刃に倒れた時、官憲の妨害を排して早速駆け付けた。

京都の宇治にある山本宣治の墓には、今でも先生の筆跡による次の石碑が立っている。

「山宣ひとり孤塁を守る。だが私は淋しくない。背後には大衆が支持しているから」 戦前戦後一貫して民主主義と平和を訴え、守った先生は今でも私の鏡である。1959年8月15日付け三井銀行従業員組合機関誌に私の「終戦の日」という詩が載っているのを最近発見した。日米安保条約再改訂の1年前の年で、日本の進路を巡り国内は動乱の時期であった。

私が29歳の年に作った詩であるが、当時の気持ちがあらわれており、いま作ろうとしても出来ない詩であろう。

この詩は戦争中軍国少年だった私が終戦時の虚無的状态から一步一步自分の足で歩き、考え、悩みながら1959年まで生きて来た時点で、当時の世相を見ながら渡りでた叫びであったのかも知れない。

### 『終戦の日』

終戦の日は真っ赤だった。

真っ赤な入道雲がむくむくと湧き上がり  
強烈な光を放って空一面に荒れ狂った。

その下で天皇も、軍隊も、学校も、裁判所も  
すべてが真赤に燃えていた。  
私は空一面を覆う真紅の色に、とまどい、目眩まいして  
地上に打ちのめされていた。

すべてが焼け払われた地上では、赤裸な人々の群れが泥まみれになって、  
生への愛着と、真実の姿を求めて喘いでいた、  
そこには、権欲も物欲もなかった。  
虚飾もなければ理屈もなかった。  
ただ、人間として生きんがためのひたすらな気持ちだけがあった。  
その上で入道雲は益々強く、激しく、荒れ狂っていた。  
私はその強烈な真紅の中に国の為という美名のもとに、  
尊い命を散らせて行ったあの若者たちの激しい怒りをみた。

あれから14年、街にはテレビアンテナが立ち並び、  
ネオンの灯は誇らしげに文明の豊かさを誇ってはいるが、  
私の心は満たされることなく、一層空しくなっていく。  
生命の歓喜や、真実の光や、人間の暖かさなどは、  
日に日にうすらぎ、空には得体の知れぬ雲が一面にみなぎり始めた。

その上空を蜃気楼の如く、錦を着た王子様、お姫様を先頭に、  
厚顔尊大な政治家、卑屈な裁判官、  
似非人格者の教育者どもが、かしこまって歩いている。  
その下の霧の中では、相変わらず赤裸の人々が  
もだえ苦しんでいるだろうが、霧のためその姿も見えない。

終戦後14年、私は恋しい。  
すべての虚構を焼きつくし、真実の姿を見せてくれた  
あの真紅の入道雲が。

今、私は日の丸・君が代の復活、戦争法である日米ガイドラインの制定、戦  
前の悪評高い治安維持法を思わせる盗聴法等々民主主義に逆行する最近の日本  
の動きに憤りを感じている。

大山先生が終戦直後に言われた「今日本は重要な岐路に立たされている」という言葉はそのまま当てはまるこのごろの祖国日本である。その意味で、終戦直後の日本の状況とそこでの自分の軌跡をふりかえり、自分の歩いてきた道程の延長としての未来を生きたいと切に思っている。又、日本の未来を託する若い学生達に日本の歴史の真実とその発展としての輝かしい未来への展望について語りかけて行きたいと思っている。そのことが私の生きてきた証であるのかも知れない。(終)

### 高橋登志男さん証言 (23 歳、船舶情報連隊見習士官、兵庫県西宮)

私の家族は両親と弟 2 人、妹 2 人と私の 7 人家族であった。私たち子どもは、千葉市蘇我で生まれた。父の仕事は運送業であった。農地が 2・3 反歩ある兼業農家である。1935 年私は千葉中学に入学した。千葉中学では前千葉県知事沼田武と同級生になる。千葉中学の時代は、太平洋戦争の前であったので、英語教育もあった。私が覚えている英語の一つは、”Time and tide wait for no man” (歲月人を待たず) である。

1942 年中央大学専門部法学科 (3 年制) に入学した。やがて 1943 年中央大学の文科学生に対する徴兵猶予の制度がなくなり、1943 年 10 月 2 年生の途中で仮卒業扱い (注) となった。

中央大学で学んでいる時、軍国主義の中にあっただが、大学・学問の自由があった。大学も配属将校が来て、学生に軍事教練を強制した。刑法学の第一人者である牧野英一教授の授業中、教室の外では軍事教練が行われていた。号令をかける声が授業の妨害となった。教授は、外に向かって「うるさい！黙れ！」と怒鳴った。大学教授が将校より偉いことが分かった。ちなみにこの将校の上に荘司久悟陸軍大佐がいた。彼は、東條英樹陸軍大臣と陸軍士官学校で同期であった。彼は、東條英樹のこと「東條といふ男」と言っていた。

大学の英語教員は、アメリカの大学を卒業した人だったので、ときどきアメリカの社会の紹介もした。アメリカに留学 (バチャラーオブローの資格取得) して大学の教員になった朝鮮出身の人もいた。英語は上手だったので、民族的差別が入る余地はなかった。ただ、中央大学の学生の中に、朝鮮民族は独立すべきだと考えている朝鮮人学生もいた。軍事教練では、消極的姿勢であるので、配属将校は「貴様！日本人だろう！」と言って、彼を殴っていた。私も、軍事教練は消極的だった。

私が大学専門部にいたころは、言論の自由、学問の自由が弾圧されてきた。新聞報道も規制されてきたので、京都大学滝川幸辰事件や東京大学美濃部達吉

天皇機関説事件も内容が国民に正確に伝えられなかった。共産党は「国賊」だと言っても、「共産党宣言」の本は非合法で見ることでもできなかった。

中央大学仮卒業後、1943年12月1日、東京湾要塞重砲連隊に召集された。その後、兵庫県西宮にある陸軍船舶情報連隊作戦室勤務となる。私の出身は文科(法科)であったが、電気工学を最初から勉強させられた。見習士官(曹長)となる。作戦は、陸軍御用船に船舶情報隊員を乗船(1隻に1個分隊8-20人)させ、米軍の潜水艦の存在を水中電波探知機で察知し、被害を最小限に抑えることである。水中の探知機には「水中聴音機」もあったが、私は水中電波探知機を与えられた。水中電波探知機は「ス号水中標定機」電波探知機は危険水域、戦闘水域、あるいは夜間に使用するが、潜水艦から発射された水雷を防御の方法は、船舶を敵潜水艦の方向に向けることにより、目標の船舶の水中面積を最小にすることであった。沈没させられた船舶に乗っていた情報隊員の報告によると、日本軍の水中レーダーの範囲は2kmであるのに対して、米軍のレーダーの範囲は4kmであった。当時の潜水艦は、1-2発の魚雷を発射すると、次の3-4発目を発射せず、駆逐艦による報復を回避し、当該海域から離脱するのが常であった。この作戦室には、これまで沈没させられた陸軍御用船の日時、名称、水域等が記録されていた。陸軍船舶については、広島に司令部があり、船舶工兵と船舶情報兵の二つに分かれていた。私は、実際陸軍御用船に乗船していない。

1944年米軍がサイパン島を占領すると、同年夏ごろから、毎日、米軍潜水艦が館山に出没していた。館山には、見物(けんぶつ)砲台要塞の中に教育隊があった。150-200人が集合教育を受けた。東京大学農学部出身の門田正成将校は他の将校と異なっていた。アメリカの作戦要務令を読んでいて、我々にも内容を紹介していた。私が、教育隊の口頭試問を受けたとき、門田将校の「お前の尊敬する人物は誰か」問いに対して、私は「リンカーン大統領です」とまともに回答した。敵国の大統領を尊敬すると言う下士官に、彼は「ああ、そうか」と受け流してくれた。彼は、我々の思想をチェックするためでなく、一人ひとりの状況を知りたいと言う気持ちで口頭試問したと思われる。彼は、戦後名古屋大学農学部の教授になった。その後、静岡県清水の重砲兵学校で最後の士官教育を受けた。私は、軍隊生活において、一度もビンタされたことはなかった。しかし、私が1度、部下をビンタした。西宮連隊の当番の時、部下が期待時間に遅れた。他の将兵が見ている中での失態であったので、私は部下にやむなくビンタをした。戦後、ビンタをされた人から手紙が来た。

1945年8月15日は、「玉音放送があるから連隊本部に集合せよ」と言われていた。講堂に約200人が集合した。ラジオ放送はザーッザーッと言う雑音がひどく私は聞き取れなかった。放送後、連隊長が「ソ連が参戦したから、いっそ

う忠勤に励むようにと言う天皇のお言葉であった」と間違った演説中の連隊長に電波中隊の将校が放送の真実を告げた。講堂は大騒ぎになった。やむなく、会議を開いて結論が出すことになった。我々は電波中隊の仲間から真実を直接聞いたから知っていたが、200人は講堂に約1時間待機させられた。連隊長はじめ幹部将校はどうしてよいか分からず、あちこちから情報を集め、指示を仰いだに違いない。

8月18-19日に、私たちには「西部軍管区の指示を受ける」と言われた。大阪城にあった西部軍管区内の参謀会議があったが、私はその会議に連絡将校として出席することになった。師団司令部からだと思うが、秘密文書は焼却せよ、糧秣を分配せよ、兵を復員させよと指示があった。軍隊が解散されるのだ。8月末から9月初めまでに兵隊は丸腰で帰郷した。私の部下は下士官2名、兵隊2名であったが、いずれも私より年上で、いつも学ぶ立場であったから、私は彼らに特に訓示をしなかった。西宮での楽しい思い出は、西宮空襲で酒蔵が被害を受けた。酒蔵に火が入ったから酒は売り物にならなくなった、ほしいものは取りに来いと言う連絡が入った。さっそく下士官が「白鹿」を持ってきた。少し、アルコール分が抜けていたが、しばらく酒を飲んでいかなかった我々にはとても美味しく感じられた。私は9月6日復員した。

戦後、千葉市蘇我の自宅に戻ると家は焼けていた。近くの叔父太田米吉は戦災死していた。話に聞くと、叔父は防空壕に入らず、爆風をまともに受けて亡くなったらしい。死体には爆弾の破片が蜂の巣のようにくいこんでいた。爆弾は蘇我一丁目だけでなく、海側の道路予定地に3発の爆弾穴、今井町の街道筋に数発の爆弾穴があった。あるいは腰板に爆弾の破片が突き刺さっていた。6月10日の空襲で鉄道機関区前の日東製粉も被害を受けていた。父は戦時中の企業統合で運送業を廃止していた。なによりも、日本が負けることのショックが大きく、50歳代であったが、ぼけていたようだ。2-3月の間、同じ蘇我でも空襲に会わなかった家でお世話になっていたが、父の顔利きで市原から材木を仕入れて、終戦の年の12月に8畳と6畳の二部屋を建築した（この部屋は現在も使用されている）。そこに親子6人が住んだ。私は、父の代わりとして家族のために田を作り、費用とりをやった。当時は失業者が多く、仕事がなかった。1951年トラック運転の免許を取得し、運送業を開始した。仕事を始めると、大学で学んだ法律の知識や考え方が役に立った。たとえば、社会常識は刑法では「社会通年」と表現し、民法では「公序良俗」と言う。戒能通考教授は「法律よりアロハシャツの兄さんが上になる時もある」と現実をも教えていた。

終戦日の夜、見習士官と戦争について議論して得た結論は「日本は精神的や人間的に負けたのではない。物量に負けたのだ。物量がないことが分かっておればこんな戦争はしない」であった。太平洋戦争も1年でやめればよかったと



思う。現在、私は、戦争はやらない方がよい、戦争は勝ってもよくないと思う。日本が勝っていれば農地解放ができなかった。男女は平等でもなく、華族制度も存続していたであろう。

(証言者注)

2004年、中央大学から卒業式がなかった学生に卒業証書が授与されることになり、65年ぶりに卒業証書が送られてきた。

(伊藤章夫編集委員注)

証言者は、徴兵される前にこれまでの人生とこれからの生き方をノートに記録している。これは遺書のようなものであるから、本当の気持ちが書かれていないと思う。証言者は勉強家である。戦後、古代史を学んでいる。曾祖母は嘉永5年生まれの人で、黒船来航や安政の地震の話聞かせてくれたと言う。

## 神田光一さん証言 (25歳、航空情報第1連隊、静岡県磐田市)

召集される前は、旧千葉市西院内町(現千葉市中央区要町)に両親と兄弟4人、合わせて6人家族であった。父は植物油やタバコ等を商っていた。父は召集されていない。私が長男で召集されたが、次男以下は戦争に行っていない。二男は若くして、肺結核で亡くなっている。私は、千葉商業学校を卒業後、入隊した。母の実家は、今井町(当時蘇我は、千葉郡である)であるが、6月10日の空襲にあっていない。

千葉商業学校時代に記憶のあることは、ある日、千葉県下の中学生が習志野練兵場に集合させられた。当時は一郡一校の割で県立中学校が設置されていた。合計1000人位参加したと思う。学校ごとに中隊を組んで行動していた。全員、本物の歩兵銃を持たされ、東西に分けられて、演習した。最後に、突撃ラッパがなり、三笠の宮が閲兵をして終わった。また、ある日、千葉市の国立東病院は、当時結核病棟があった。そこで、地ならしの勤労奉仕があった。私たちのクラスでは、先輩によるビンタ等の暴力はなかった。

航空情報第1連隊の本部は水戸市にあった。最初は、航空情報学校で勉強させられた。レーダーを設置した最新式の部隊であった。私は、参謀付きの会計の仕事に従事した。B29が日本に接近する機影を直径30cm位の大きさのブラウン管で見ている。B29の編隊は40-50機編成で、富士山を目標にして、富士山から右旋回して、東京方面に向かった。この陣地は敵艦載機の攻撃を受けなかった。ドイツが降伏寸前のベルリンの状況も入手できた。ポツダム宣言(無条件降伏勧告)は、聞いていない。ここには、フランス語などを理解できる大学教授並みのスタッフが配置されていた。無線所は東京小金井にあった。

その後私たちは、天竜川を挟んで、浜松市の対岸にある磐田郡御厨（みくら）村の寺の付近に陣地を設営して駐屯した。ここにいた時、千葉の妹から、7月7日の焼夷弾による空襲で家が焼かれ、母と妹が路上を避難中に直撃を受けたらしく死んだと言う手紙を受け取った。しかし、こんなことで帰省は許されなかった。

1945年8月15日、ここで、部隊員約50人が集合させられ天皇による終戦放送を聞いた。山の中なので電波状況が悪く聞き取りにくかった。結局、放送の内容が分からなかったが、夜食事の時、村人たちが「日本は戦争に負けた」と言う会話を聞いて、初めて敗戦を知った。私は、敗戦を知ってさほど驚かなかった。なぜなら、戦争全体において日本側の不利な戦況を知っていたし、家族が空襲で二人死んだことも知っていたし、また食料が不足していたから、しょうがないという気持であった。

部隊では、すぐに復員する組と残務整理する組に分けられた。私は、空襲で家族を亡くしているのので、8月18日に帰ることが出来た。当日、千葉駅に立つと、一面焼け野原で、見える建物は、亥鼻町の千葉医学部と貝塚町の千葉刑務所だけだった。がっかりした。我が家の敷地にバラック小屋が建っていた。ここに家族3人が生活していた。ここで、約1か月いて、貝塚町の叔父の家に疎開して、そこに約3か月いた。職人に頼んで焼け跡に家を建てた。この間の生活は、電気は来なかったが、井戸があったので何とか暮らせた。買い出しもしたが、家には商品のタバコがあったので食料と物物交換ができた。

私は、千葉市の戦災遺族会の2代目会長である。初代の会長は蘇我1丁目の小河原さんだった。毎年、市役所と一緒に市民会館などの公共施設で慰霊祭を開催している。千葉市長も参列している。戦災者の名簿は作成して、関係者に配布されたと思う。「まほろば」施設に入居する前は、地元の商店街会長もしていたので、遺族会の仕事は不十分だった。遺族会は存続してほしいと思う。私の同級生は124人いたが、現在生存しているのは20人位である。友人で戦死したのは5-6人いる。

私は、戦争に反対である。戦争はやってなはならない。戦争は、一家をばらばらにする。近所の人たちもばらばらになる。栄枯盛衰の感じがする。平和でいることが根本である。

（編集委員注）

神田さんは、1921年（大正10年）生まれである。中学生の時から毎日日記をつけておられる几帳面な方である。日記は段ボール箱に収納されているので見られないが、なんとかして、戦争時代の記録だけでも読ませてほしいと願う。神田さんは、記憶力がいいだけでなく、毎日新聞を1時間精読される勉強家でもある。俳句歴も長く、施設に入居されて人の句集から、「戦前は吾が家に聞け

し蛙声」を紹介したい。商人の父君の言葉に「四十、五十貧乏世帯、六十花を咲かせて死ぬ」とあるが、神田さんは、元気に 90 歳に向かっておられる。

### 中村美代さん証言（17 歳、千葉陸軍病院救護看護婦、千葉市椿森）

私は、終戦当時、千葉市椿森の千葉陸軍病院（現在独立行政法人国立病院機構千葉医療センター）で従軍看護婦として働いていた。新入りの 17 歳であった。1945 年 3 月に日赤大宮救護看護婦養成所を卒業していた。戦争が激しくなり、救護看護婦の短期の養成が求められ、3 年制から 2 年制に短縮されていた。卒業後、しばらく幼い弟の面倒をみていたが、7 月 10 日召集となった。召集令状はノート大の大きさと真っ赤な色であった。日赤から発行された文書であった。切手は一銭五厘の召集である。しかし、7 月 7 日に千葉市空襲があったので、7 月 10 日、日赤千葉県支部（当時は現在の NHK 建物の横にあった）に全員が定時に集合することは困難であった。そのために当初、新潟県新発田に派遣される予定が変更されて、千葉陸軍病院勤務となり、私は衛生材料科勤務となった。これは病院の地下壕でペニシリンを製造する仕事であった。期待していた患者に触れる仕事ではなかった。当時、「ペニシリン」は敵性英語であるために「壁素（へきそ）」と呼ばれていた。野呂栄太郎夫人は医学部入学を拒否され、薬学部に入學し「壁素」の研究をしたと聞いている。私の班は看護婦 4 人体制であった。地下壕は 10m 四方の板の間の部屋で裸電球が 10 個ほど下がっており、明るい部屋であった。製造過程は青カビをブイヨンの培地に植え付け、温度を上げて培養し、滲み出した液を採取した。仕事は日勤であるが、夜は寄宿舍の木製ベッドで就寝する場合でも、空襲警報が発令されることが多いので、紺色制服と編上靴（へんじょうか）を脱がずに寝ていた。実際、千葉市で 6 月 10 日及び 7 月 7 日の大空襲以後も散発的な空襲はあった。火の手があがったのを 2、3 度見ている。私は直接、艦載機の機銃掃射を受けなかったが、飛行している機影を見た。空襲警報発令のときは裏の松山に退避した。避難している間、上官の軍曹が菊池寛の小説を看護婦に聞かせていた。

外科病棟勤務の救護看護婦の仕事は、退院できる人は退院させていた。治療で温泉に護送することもあった。

6 月 10 日及び 7 月 7 日の千葉大空襲については市原市大桶にいたので見えない。応召するために千葉市に入ったときは、戦災死体は片付けられていたが、道路両脇に破壊されたり、焼かれたりした家屋、家具などが積まれていた。まだくすぶっているのもあった。

私が看護婦の道を志したのは、大嶽康子著の「病院船」（昭和 13 年（1938）

初版)を読んで感動したからである。当時、看護婦を目ざす少女のベストセラーであった。私は、市原郡の養老小学校高等科の時(13歳)に先生から、「師範学校に行きなさい」と言われたが、市原郡の鶴舞高等女学校は遠いので寄宿舎生活が必要条件であった。経済的な理由で高等女学校は進学できなかった。当時、高等女学校へ進学できたのは50人クラスで3人であった。

日赤大宮救護看護婦養成所に入学したのは14歳であった。一クラスに48人の看護学生がいた。埼玉県と千葉県出身者が半々の割合だった。教科は、解剖、内科、外科、薬科等基礎的な勉強をした。同時に日赤出身の看護婦は宮家に上がることもあるので、礼儀作法も重んじられていた。私は弓道、茶道、華道も勉強した。言葉使いは「さようございます」等の丁寧語を使うよう教育された。私の年代は終戦の年に卒業だから、外地に行くことはなかったが、1歳年上の先輩たちは外地、戦地、病院船勤務に赴いた。埼玉出身者は外地勤務が多く、その3割ぐらゐは戦後帰国できなかった。フィリピン戦線では空襲で死亡している。福永充郎構成詩集「憲法光りを求めて」に紹介されている元従軍看護婦竹下まつさんの話では(文章は多いので適当なものを選んで下さい)食べるものがなくなり、ゴキブリを捕まえて食べた。看護婦養成所で勉強していたときも、大宮駅から出発する先輩看護婦たちを見送り、また「英霊」となって帰ってきた兵隊や先輩看護婦らを出迎えた。看護婦養成所初期には3年制(甲)であったが、短期養成が求められ2年制(乙)となっていた。

子ども時代も軍国主義一色であった。1935年春、市原郡養老小学校〇〇分校に入学した。当時、先生の数も少なく、複式学級で、1-2年生、3-4年生がそれぞれ同じ学級であった。私の担任は森良作先生で他に佐久間順子先生がおられた。5-6年生になると本校へ通った。

3年生の寒い日に、南京陥落の祝賀行列が行われた。大桶、川在、新巻の3区の小学生も動員され行列に参加した。「勝って来るぞと勇ましく」と軍歌を歌って歩いたかもしれない。霜柱を踏んで歩くので下駄の足はグチョグチョの冷たい泥水で汚れた。下駄の鼻緒が切れる子もいた。子どもが苦勞しているのに、先生も、親も何も言わなかった。天皇は現人神(あらひとがみ)で、絶対的存在だった。12月8日は太平洋戦争宣戦記念日であったので、大詔奉戴日と称して、行事があった。

終戦を告げる放送は陸軍病院講堂で聞いた。陸軍病院院長はじめ、軍医、衛生兵、陸軍看護婦、救護看護婦、職員ら約400人が整列した。看護婦は100人ぐらゐいた。放送はガーガーと雑音がひどく聞こえないところもあったが、概要は理解できた。戦争は終わったのだ。しかし、当時私は、戦争が終わった意味がよくわかっていなかった。一部の兵隊は騒いだ。しかし、これで明るい夜が迎えられると正直に話す人もいた。翌日から帰京する職員が出てきた。院長

はトラック 1 台に米を積んで家に運ばせたと言う噂も飛んだ。私はガーゼ 1 反（たん）と雑セン（何でも切れる鋏）をもらった。

私は、家に帰らず、1947 年 11 月まで病院に残って残務整理をした。新千葉班は婦長以下 20 人の看護婦で編成された。私の班には使丁がつかなかった。ある日、千葉病院から患者 100 人を貨車に乗せて九州の久留米まで軍医と看護婦で護送した。島根班は現地で解散した。私達千葉班は往復 7 泊 8 日の出張であった。軍医が別府温泉で休んでいこうと勧めたので、病院船「たちばな丸」に乗船することができなかったが、軍医と一緒にあったので、お咎めなしであった。久留里の前に、引揚船を迎える仕事として、久里浜へ行く命令があったが、みんなが反対した（なぜですか？）。1947 年 11 月、千葉病院では「やめたい人はやめてもよい」と病院から告示された。多くの人がやめ、私もやめた。退職金や出張手当ももらえなかった。給料は判任官並みの 40 円であったが、闇市で買えるものはなかった。病院勤務時代は寄宿舎で生活した。

1947 年、千葉陸軍病院勤務を解除されて、実家の市原市大桶に戻った。その後、地元の〇〇小学校教員（〇〇中学校も兼任した）になることができた。理科、保健体育の一部を担当した。私は教育職について、とにかく勉強に夢中であった。授業のない時間は図書館にこもって、本をむさぼり読んだ。「中村先生探しているなら、図書室にいるから」と語り草になったほど読書が好きになった。また教頭の鈴木先生は人柄もよく民主的な先生であった。先生が転任されるときは生徒が小湊鉄道の駅まで見送った。鈴木先生、英語の先生、千葉大学の実習学生と私はよく図書室で日本の戦争や平和な将来について語り合った。ここで長い間、軍国少女であった私ははっきりと目覚めた。

私は、今生きていることは幸せだと思う。戦争は愚かなことで、破壊しかない。現在も日本は日米安保条約のもとで戦争の準備をしている。戦争準備をやめれば、税金も安くなる、消費税もいらぬ。世界中の人々が一步一步目覚めてきている。父は、よく、私の眼の黒いうちは世の中変わらないと言っていたが、今変わりつつあると思う。私もそのために尽くしたい。

#### （４）外国占領地生活と引き揚げ経験（民間人）（４人）

##### 岩品美津子さん証言（18 歳、ホテル従業員、中国旧南満州鞍山市）

私は、終戦時の直前 1945 年 8 月 13 日に知り合いの日本人土建会社社長石川さんとともに中国旧南満州鞍山市にかろうじて到着したばかりだった。私は、もともと長崎県出身であったが、黒龍江省の親戚が経営するホテルの手伝いするために 1941 年満州に渡っていた。石川さんは食糧を確保するための土地を購

入する用事で鞍山市から巴彦村に来ていた。ひょんなことから、私は石川さんと鞍山市に行くことになった。1945年8月7日、私はすぐに戻ってくるだろうと考えて、軽い気持ちでモンペ、靴、手提げ鞆の姿で出発した。この時期は日本降伏1週間前のできごとで、ソ連軍が中国東北部で参戦する寸前だった。外国人ならそんな緊迫した情報が入手できたが、満州国の普通の人間には情報が統制されていたので世界の情勢は全く知らされていなかったのである。

出発前に1500円ぐらいあった貯金から500円を下ろして鞆に納めた。黒龍江の港から船旅で佳木斯（ジャムス）方面に向かう船を待った。何時も来る船はなかなか到着せず、遅れて来た船には、重装備の日本軍兵隊が、船が沈みそうになるぐらいに乗船していた。異常な光景であったが、石川さんと一緒だから情勢の変化を何も疑わず、その船に乗った。ハルピン港には8月8日の夜に到着した。そして、8月9日の夜明けに、ハルピンのホテルでソ連軍戦闘機による機銃掃射の空襲を体験した。ホテルの従業員が「空襲警報」を告げるや否や、黒色のソ連軍戦闘機2-3機の機銃がパツパツと火を噴いた。初空襲は一瞬のうちに終わった。私と石川さんらは、ホテルの地下に避難したが、とても怖かった。日本人たちは、ソ連軍が日本に参戦したから空襲されたと話していた。私は、ソ連と日本の間には中立条約があるから、満州国は安全だと聞かされていたので、ソ連軍侵攻は夢にも思わなかった。しかし、まだ日本の関東軍が満州を守ってくれると信じていた。ホテルには日本軍隊、日本警察、日本人経営者は誰もいなかった。代わりに濃緑色の制服を着た中国人民兵らしい集団がホテル周辺を警戒していた。ホテルには、困惑した日本人でごった返していた。そして、我々も追い出された。ハルピン駅から鞍山駅までの汽車の切符は購入したが、ハルピン駅前には、逃げてきた日本人の女性、子ども、老人であふれていた。中国人民兵が2-3mの棒を振り回して駅から日本人集団を追い払っていた。若い母親は乳児を背負い、両手に荷物を持ち、小さな子どもは母親にしがみついていた。彼らも民兵に追い払われていた。とても惨めな日本人の姿であった。そこに日本軍隊も日本警察も存在せず、すでに、日本は満州国の支配者でなかった。今から考えると、この混乱時に子どもが手を放せば2度と親に会えないほどの雑踏であったから、迷子になれば死ぬか、残留孤児になるかしかなかったと思う。私達は中国人から馬車を雇い、奉天（現在の瀋陽）を經由して鞍山市に着いたのは8月13日であった。石川さんの家で8月15日正午に天皇のポツダム宣言を受諾する放送を聞いた。私は、「ああ、戦争が終わってよかった」と思った。同時に日本と自分の将来に対する不安が頭をもたげてきた。この二つの考えがゴチャ混ぜになった。

それから、石川さんは私を呼んで、緊急事態が生じたからこれから行動をとるにできないと告げた。同時に鞍山市鉄西区にある日本人経営の鉱山（炭鉱か

もしれない) 労働者の寮母をしていた岩品フミ (当時 57-58 歳、後にフミは私の義母になる) を紹介してくれた。寮にはまだ日本人労働者が少し残って働いていた。フミは長男が応召していないと言いながら、私を寮に泊めてくれた。寮には米や缶詰の食料が多く保管されていたので、食事には少しも困らなかった。8 月下旬にフミの長男正男が軍隊から帰ってきた。彼が、後に私の夫になる人である。

正男によると、彼は奉天に駐屯していた部隊に所属していたが、突然指揮官が姿を消したので、部隊は自然解散状態になったのである。彼は同じ部隊の中村泰三さんと一緒に鞍山市の自宅に戻った。中村さんは千葉市大金沢出身で、戦友であり、帰国も、戦後も親友となった。二人は情勢の変化を読み取り、部隊解散時に軍服を脱いで、中国人に中国服と交換してもらって、それに着替えて家に戻ってきた。鞍山市は戦後、蒋介石率いる国民党軍、ソ連軍、毛沢東率いる八路軍 (後に中国解放軍) が支配者として入れ替わった。国民党軍と八路 (パーロ) 軍は内戦状態で、お互いに砲撃しあっていた。砲撃が始まると満人 (中国人) は荷物を持って逃げていた。1945 年 10 月に日本人居留民会が無事帰国を願って組織された。

ここに正男と中村さんが日本人を救済するために通訳として活躍した。正男は蒋介石軍発行の通訳証明書と八路軍発行の通訳証明書を入手していたので、普通の日本人が知らない情報をいち早く入手し、同時に中国側当事者と交渉することができたことは画期的なことであった。正男が通訳の仕事ができたのは、日本にいた時、彼は酒屋の息子であったが、不良少年になっていたので母フミが正男を満州のセメント会社に出すことにした。満州に行くにあたって、フミの弟にあたる叔父さんが、中国に行くからには中国語を勉強しなさいと助言した。外国語学校で勉強して、中国語 (当時は支邦語) 通訳 2 級 (2 等かもしれない) の資格を得た。これが私たちの将来を決定することになった。

正男は通訳としての特技はあったが、人一倍の優しい気持ちと権力に対する反抗心を持っていた。満州で応召し、近衛兵として配属されたが、日本軍内部の非人間的な様子に我慢がならなかった。正男の話によると、軍隊は地獄だと言う。次のようであった。意地悪な上官や古参兵は兵隊をいじめて楽しんでいった。兵舎備え付けの水を張った防火用バケツに自分が吸ったタバコの吸殻を投げ込んでおいて、今日の当番は誰かと呼び出し、吸殻の掃除ができていないと難癖をつけて殴るのである。1 人の「失敗」も全体の連帯責任問題だとして、全員を殴りつけた。理不尽の暴力に我慢ができないインテリや弱い兵隊はトイレの梁に紐をくくりつけて自殺を遂げていた。自殺者は一人や二人でなかった。自殺者の留守家には「病死」と告げられた。自殺死にすると軍隊の陰湿な内部問題が露見するのを恐れたのである。軍隊内のリンチは公式には禁止されてい

たが、侵略戦争を遂行する残虐行為に無感覚な兵士を作るうえで必要なリンチだから半ば公然と認められていたのである。

上官の制裁リンチは反抗的な兵士には徹底して行われた。正男は狙われて、ある日、上着のボタンをはずして歩行中、上官から「天皇からいただいた軍服のボタンをはずして歩くとは何事か！」と難癖をつけられて、鉄鋏がある皮底のサンダルで往復ビンタを食らわされた。頭がくらくらしたが、悔しいので殴りつけた上官の前に進み出たら、また殴られた。意識が朦朧としてきたが、負けずに前に出た。このことを繰り返してついに上官を壁際に押し込んで気絶した。それから、兵営に寝かされ正気に戻ったのは1週間後であった。そのとき耳は聞こえず、顔は3倍に膨れ上がっていた。目は開けられなかった。戦後有名な映画となった「人間の条件」や「戦争と人間」に出てくる場面と同じだと、正男は言った。これで正男は存在感のある兵隊となった。軍隊の中では、上官はたらふく食べていたが、兵隊はくずのようなものしか回らない。夜間の歩哨は翌日休めないととてもきつかった。

1945年11月ごろ、八路軍が進駐して来たので、正男は八路軍の通訳となった。最初の仕事は、天皇の終戦放送を認めず徹底抗戦を主張して七レイ子の山に立てこもった関東軍の部隊に降伏を勧めることであった。正男の説得にもかかわらず、日本軍部隊は降伏に応じず、全員戦死した。これは終戦の機会を生かさない全く意味のない死であった。戦闘後に現地で彼が目にしたのは、巻き添えになった非戦闘員である女性や子どもの無残な死体があった。この事件で、正男はあらぬ疑いで八路軍に逮捕されたが、1週間で釈放された。正男が軍国主義者でなかったことが理解されたと思う。古賀さんという人は逮捕後、半年も抑留された。戦時中は、八路軍は日本軍による討伐の対象であったから、「八路は匪賊だ」、「八路は人殺し、略奪者だ」と教育されていた。八彦県の県公所特務機関特務股長はいつも「高粱が人の背丈を過ぎて大きくなった頃に八路が出てくる。すると八路を退治に行くのだ」といつも言っていた。ある日、彼は酒の出た会席の場で「八路討伐に行ったら、八路が出てこないの、頭に来たから若い農民を捕まえて、氷詰めにしてやった」と自慢げに話し始めた。会場の多くの人々は笑って聞いていたが、私はびっくりした。「生きたまま、氷漬けにしたの」と聞いたら「そうだ」と言う回答であった。なんと言う残酷なことを日本人がするものだと思った。満州では、秋になると朝晩は寒く氷が張る。捕まえた無辜の中国人を動けないようにして木製の水をためる容器に投げ込んだのである。「八路は人殺しだ」と教えられていたことは、逆だった。人殺しは日本人がやっているのだ。その後接した八路軍は国民党やソ連軍に較べて最も礼儀正しかったし、規律を守っていた。

翌1946年秋頃に、ソ連軍が日本人経営の鞍山の会社を接收した。併せて、武



器を出せ、従わない者は銃殺するという布告を出した。当時の満州における日本人は拳銃や日本刀を所有している人もいた。正男の家にも日本刀があったが、ソ連軍に提出せず、刃を折って庭に埋めて処理した。ソ連軍は日本軍捕虜をシベリアで強制労働の使役に従事させるための準備を開始していた。これは、明らかに国際法違反だった。今は外国となった満州に取り残された敗戦国民の一般の日本人や日本軍捕虜兵士にはそんな情報は来なかった。9月末になると、夏服の軍服を着た日本軍捕虜が無害者に乗せられてシベリア方面に次ぎ次と連れて行かれるのも目撃した。その時、私は、これから冬に向かうのに夏服ではかわいそうだと思ったが、シベリアで強制労働に使役されると知らなかった。ある日、正男が突然、家に約30人の夏服姿の旧日本軍兵士連れてきた。玄関に靴があふれた。正男は私達家族に「静かにかくまってくれ」と言って、また街へ出かけた。正男の妹と私は、正男がなんか悪いことをしているのではないかと不安だった。日本軍兵士の食事、宿泊の世話をしながら預かって、暫くしたころ正男が戻ってきた。正男は「シベリア行きの列車が出た後は、ソ連軍の監視が手薄になったので、シベリア行き待機させられている日本軍捕虜を逃がしてやるのだ」と説明した。私は、正男のやっていることはなんという素晴らしいことかと思った。正男は日本軍兵士に「今から、軍服を脱いで町へ三々五々に出て逃げてください」と言うのだ。

終戦から1年経った8月に満州で、フミとおじさんの前で、私たちは生まれた娘とともに正男と結婚することを誓った。正男は中国人の友人がたくさん出来た。私達は帰国することを考えていたが、正男は中国人から、「中国に残って、仕事してくれ」と言われて悩んでいたが、フミの老後のことを考えて帰国することになった。鞍山駅から家族一緒に無蓋車に乗り込んだが、列車はスムーズに走らなかった。最終駅に着くまでに5-6箇所の駅で長い間停止した。中国側は日本人帰国者から通行料を請求しているらしかった。正男は停車するたびに駅当局らとボランティアとして交渉をしていた。ここでも正男の通訳・交渉能力が人々の役に立った。無蓋車に雨が降ると惨めだった。家族が風呂敷の下に入っても、体の表面に水が流れた。引揚証明書も貯金通帳も雨でグチョグチョになった。胡蘆（コロ）島の港から元は貨物船らしい引揚船「雪風」に家族で乗れた。途中、子どもや老人が帰国寸前に亡くなった。海上に葬る水葬であった。船が博多港に着いたのは1946年8月26日であった。

私は、正男、フミとその娘らは北海道に行くと言うので、博多で別れた。私は長崎の実家に着いて長崎の原爆跡を見た。私の妹は大村国立病院の看護婦をしていたが、被爆者の看病で、自ら二次被爆していた。それがもとで、妹は内臓疾患により、吐血して50歳代の若さで死去した。私は妹が死んでから、原爆手帳を見て被爆者であったことを知った。昔は、不都合なことはなるべく隠し

ていた。

1947年、伊万里の人と一緒に上京した。東京は一面焼け野原だった。水道の管が歪んで空に突き出していた。正男は引揚証明書を北海道に忘れたので、東京青山の引揚者収容所に入ることが出来なかった。やむなく、私達新しい家族と戦友の中村さんは収容所に併設されていた防空壕で生活した。壕内は3畳ぐらいの広さで床板があったが、壁は赤土のままだった。雪解け水が浸水した。たちまち、フミが体を冷やして、膀胱炎をわずらった。フミの妹が疎開先の静岡県富士宮市に來いと言ってくれたので、行ってみるとトタン屋根の2畳程度の物置小屋だった。フミと私はここで生活したが、食べるものはなく極貧生活を体験した。引揚者に対して蚊帳の配給があったが、これを換金して食料確保に当てた。背中に負ぶっていた1歳の娘が大きな袋を見ると「パンパン」と言った。これは、大きな蚊帳の包みを持って行って、換金してパンを買って娘に食べさせたことに始まるらしい。内職もしなければならず、三省堂の英語辞書の薄紙のページを割いて、巻きタバコを作った。

長崎からも、戻って來いと言う手紙をもらったが、私はがんばった。母の病氣も治ったので、1949年、すでに中村さんが入居している千葉市稲毛の小仲台のバラック県営住宅をめざして千葉に戻った。総武線沿線は一面、畑だったので、田舎だと言う印象を受けた。東京も千葉も主要駅には手や足を失った傷痍軍人が、5-6人一緒に揃いの白衣を着て楽器を演奏して生活費をもらっていた姿は痛た痛たしかった。街にはふかしたサツマイモが売っていた。1950年、中村さんは出産し、正男は「爆弾あられ」のリヤカーを引いて農村に行き商売していた。米に甘味料（サッカリン）を入れてボンと言う音とともにふっくらした菓子が出てくる。たいした儲けがなかった。私は家を探して、戦災から免れた県庁の高い階段を登って引揚者援護の係りを訪ねた。係員には全くいい加減にあしらわれたが、諦めず8回通ったら、その係員は「あんたにゃ負けたよ」と言って千葉市寒川の戸建県営住宅の鍵をくれた。朝日造船社宅を改造した6畳一間であった。流しとトイレは共通で、風呂はなかった。家賃は月300円だった。同時に申し込んでいた千葉市大森台の県営住宅の抽選に当たった。家賃は月1000円だったが、フミが子どもを育てるには庭が必要だと主張したので、リヤカーで大森台に引っ越した。当時は生活が苦しいので、妹に助けを求めたら、妹は椎名病院の家政婦として半年働き、その収入をそっくり私達にくれた。知り合いになった佐賀県出身の中原さんが、千葉市白旗出身の市議会議員に相談して医療扶助と生活扶助の手続きをしてくれた。ありがたかった。こうして、生活保護を受けていたので、千葉市役所の福祉担当者が、「生活保護を受けている人は高い家賃の県営住宅に入居できない」「小遣いをやるから出なさい」と指導に來た。私は、義母と娘が安心して住めるところを最優先したので「そんな

に言うなら、生活保護はいらない」と回答した。その担当者は何も言わなかった。後に先の県営住宅の担当者で大森台の県営住宅で偶然にあった。彼は私に県営住宅から県営住宅へ移ることはできないと私が不正をしたとばかりの難癖をつけた。私は抽選に当たって入居したと回答した。問題は県庁職員が家賃の安い県営住宅に住んでいることこそ規則違反であった。こんな公務員の「役得」がいつの時代にもあった。

これで私たちの戦後がやっと終わると思っていたが、1951年、石炭運送の仕事をしていた正男が、千葉市長洲で重いものを持ち上げたとき、腰に激痛が走り立てなくなった。千葉医科大学病院では脊髄カリエスと診断された。栄養失調の上に結核菌に侵されていた。私は芋でも、何でも食べたが、正男が米しか食べない偏食であったことと過労がたたった。いつも元気な正男が突然に「一家心中しよう」とつぶやいた。私は、「なんていうことを言うんだ」と反論しながら、正男を励まし、自殺を思いとどませた。正男は蘇我病院で2年7ヶ月静養した。正男はやがて、日本患者同盟の活動を始めた。元気を取り戻したので、ようやく戦後が終わった。

今日の私は、多くの人たちに助けられて生きている。助けてくれた人たちに本当に感謝している。今、私は人のために生きたいと願っている。同時に、64年前に国民を放置して逃げた軍隊と政府を許せない気持ちは変わらない。人間を残酷にする戦争は絶対に繰り返してはならないと強く願う。

